

史料紹介：文化元年ロシア使節レザノフ来航関係史料：福岡藩家老三奈木黒田家文書『魯西亜船渡来記』

梶嶋，政司
九州大学附属図書館記録資料館：助教

<https://doi.org/10.15017/1547071>

出版情報：九州文化史研究所紀要．52，pp.119-200，2009-03-31．九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門
バージョン：
権利関係：



史料紹介

文化元年ロシア使節レザノフ来航関係史料

——福岡藩家老三奈木黒田家文書『魯西亜船渡来記』——

梶 嶋 政 司

黒田源左衛門一定と長崎警備

本史料は、文化元（一八〇四）年九月、ロシア使節ニコライ・レザノフが通商を求めて長崎に来航し、翌年三月、幕府に通商要求を拒否されて帰帆するまでの間、長崎港に滞船したナジェジダ号の警備を勤めた福岡藩の家老黒田源左衛門一定が任地で記した日記である。レザノフが長崎に来航した文化元年の長崎警備は佐賀藩が当番、福岡藩は非番年であった。翌文化二年三月にレザノフが帰帆する時は交代して福岡藩が当番となった。黒田一定をはじめ多数の福岡藩士が長崎に赴任した。日記中には福岡藩士のほか、佐賀藩聞役や、長崎奉行所の諸役人などが登場する。福岡藩によるロシア船警備の実態を窺うことが出来る貴重な史料と言える。この時、中老吉田六郎太夫も黒田一定とともに長崎にて任に当たり、日記を残している（吉田家文書三九『魯西亜船渡来記』、九州大学記録資料館九州文化史資料部門所蔵）。

黒田源左衛門一定（清定）は安永七年一二月二八日生まれ、天保一一年二月六日没。寛政一二年十一月二日家督

を相続した。一定の時代はレザノフ来航や文化五年のフェートン号事件など、長崎に異国船が度々来航した時期であった。家督相続の直前にあたる寛政十二年九月、一定は福岡藩の長崎警備の主要な事績をまとめた「長崎覚書」(三奈木黒田家文書四六七)を編んだ。また享和三(一八〇三)年には「御番方ニ掛入用之書付有無」を長崎開設上原源一郎に問い合わせ、長崎奉行の記録から、寛文二(一六六二)年と貞享二(一六八五)年の南蛮船渡来時の警備についての記事を書写するなど積極的に異国船来航に関する情報を収集した。一定は、「文化二乙丑九月三日南記重国作之刀ヲ給ル、長崎エオラシヤ船渡来才判行届テ也(中略)同十一甲戌四月廿八日長崎ニ大台場取立依苦勞鞍鎧ヲ給ル、文政四辛巳八月三日長崎数度辛勞ヲ被賞乗馬ヲ給ル」と、長崎警備の尽力によって度々褒美を頂戴した。

以下、福岡藩の長崎警備を概観しておこう。寛永一六(一六三九)年にポルトガル船の来航を禁止した幕府は、翌年沿岸警備を強化した。寛永一八年二月八日には、福岡藩主黒田忠之が同年の参勤を留められ長崎へ出動した。五島盛利、大村純信は自領の警戒を命じられた。平戸オランダ商館の長崎移転が命じられたのもこの年である。翌寛永一九年、佐賀鍋島家が長崎警備を命じられた。以後元治元(一八六四)年に廃止されるまで隔年で福岡黒田家と佐賀鍋島家が長崎警備を勤めた。正保四(一六四七)年のポルトガル船来航後、翌慶安元年に長崎奉行の指示で戸町と西泊に幕府貸与の石火矢・玉薬の貯蔵庫と常設の番屋が建てられた。明暦元(一六五五)年には長崎港内外の台場七か所(大田尾、神崎、女神：以上当番担当、白崎、高鉾、長刀岩、陰ノ尾：以上非番担当)が完成した。毎年四月頃に交代、九月半ばまで約一〇〇〇人で警備にあたった。当番非番の交代には藩主が長崎に赴き、任期中は在国して警備に備えたため、福岡藩と佐賀藩の参勤交代は、非番年の一月に参府、翌年二月暇に短縮された。

福岡藩では八代治高以降養子・幼少の藩主が相次いだ。このため藩政は家老層によって担われた。長崎警備については、五代藩主宣政の時期、正徳四年、享保元年、享保三年と支藩直方藩主黒田長清が代番を勤めたことがあつ

た。『治高公御病氣ニ付長崎御番松平肥前守様江被相渡候節之記』（三奈木黒田家文書426）によると、

（天明2年：引用者注）十月朔日、治高公御病氣ニ付、長崎御当番所松平肥前守様江御振替御願被成度趣於江戸詮儀有之、御年寄御権門方江被得御内意候処、御願被成可然趣ニ付、御国元御下地相伺候而者、肥前守様為御参勤御国元御発足之時節ニ向候ニ付、於江戸取御願書被指出候段言上有之、然者早々相仕廻長崎江罷越居申候而御願之通り被仰出御当番所肥前守様江被仰付候ハ、御同所様御番手参着次第第二御番所相渡候様被仰付候事（後略）

とある。病氣の八代福岡藩主黒田治高に代わつて八代佐賀藩主鍋島治茂が長崎警備を勤めることが検討されたことがわかる。治高は天明二年二月二日に八代藩主となったが、実は同年八月二日に没していた。つまり引用史料にある一〇月朔日にはすでに亡くなつていたのである。喪の発表は一〇月二十四日であつた。十二月一日に雅之助（長嵩、斉隆）が九代藩主となつた。

長崎御番所之儀我等并千之助就幼年、右幼年之内者家老中名代ニ而勤之長崎御用并家事之仕置等別而入念厳重可取計旨周防守殿於宅以書付久野外記江直被申渡候、委曲外記野村東馬可申越候也

（天明二年）
十二月十九日

（長嵩黒印）

黒田美作殿

右に掲げた『長嵩公就御幼年長崎御番家老中御名代ニ而相勤候様周防守様久野外記江被仰渡候趣被為仰下候御書』（三奈木黒田家文書402）によれば、九代長嵩（斉隆）、千之助（七代秋月藩主黒田長堅）はともに幼少なので、名代として福岡藩家老の黒田美作（源左衛門一庸）が「長崎御用」（長崎警備）および領内仕置を行うことが命じられた。『御名代日記』（三奈木黒田家文書四三二）を見てみると、

翌卯二月同年長崎御当番所被仰付、御番所御石火矢大筒等如前々御渡可被成旨御老中様松平肥前守様江之御

奉書、柘植長門守殿長崎御奉行御持参、依之御奉書東馬方高浜十太夫大組江戸詰方差添候而被差越之、江戸二月十九日出立三月廿三日到着ニ付、翌廿四日松平肥前守様江御馬廻頭以御使者御相達、久世丹後守殿長崎在勤御奉行江大組御使者を以被仰達、御番所為御請取伊織御家督初而之御家老被替候御格なり御番頭御番手中出船

一御番所御請取之上 御名代美作方被差越候旨外記東馬方奉書を以被仰付（後略）

とあつて、翌天明三年三月、藩主就任後初めての長崎御番所御見廻には、名代として黒田源左衛門一庸が赴いた。翌々天明五年は「長崎御番所之儀、本家雅之助幼年之内者家老共名代にて是迄相勤候処、当年者其方儀（八代秋月藩主黒田長舒：引用者注）雅之助為名代御暇被下候間、雅之助家来諸事入念申附候様被仰出候旨、於御白書院縁頼、老中列座、周防守申渡之」と九代福岡藩主長髯（斉隆）の名代として八代秋月藩主黒田長舒が暇を下されたと、『柳営日次記』にあることが『通航一覽附録卷二』の記事からわかる。

天明二年一二月以来在江戸であつた九代斉隆が国許に入るのは寛政五（一七九三）年のことである。しかし寛政七年には斉隆の死去に伴い、急遽黒田長舒に長崎警備が命じられる。寛政九年の当番年も官兵衛（一〇代福岡藩主黒田斉清）幼年に付、長舒が暇を下され長崎警備を勤めることになった。斉清は寛政一二年九月、六歳になったとき初めて江戸に登り以後文化八（一八一）年に帰国するまで江戸で過ごした。この間、福岡藩の長崎警備は八代秋月藩主黒田長舒、九代秋月藩主黒田長韶が名代を勤めた。

天明から文化期の福岡藩は幼少の藩主が続き、長崎警備は支藩の秋月藩主などが名代を勤めることが多かった。黒田源左衛門一定は福岡藩の家老として番所詰のため長崎に赴いた。

最後に、吉田家文書三九『魯西亜船渡来記』を参照し、非番年（文化元年）に長崎に派遣された福岡藩士の主立つた人物について列記しておこう。

家老 黒田源左衛門

中老 吉田六郎太夫、齋藤三郎太夫

大組頭 櫛橋久左衛門

鉄砲大頭 竹田九郎太夫

用聞役長崎用向請持 原吉藏

馬廻組 大塚孫太夫

大組 竹中半助、馬杉喜右衛門

長崎聞役 上原源一郎、立花善太夫

右筆役 脇山才次、久保山文助、安河内久之進

目付 三好助太夫

普請奉行扶持米奉行兼 根本源七

足輕頭 浦野半平、吉田作之進、桐山孫太夫、国友左門、伊藤八太夫、江田源太夫、白石源右衛門、塩川市助、

浦上利太夫、細江十左衛門、長野三四郎、原田久八、河端善太夫、則木文次郎、味岡団平

石火矢役 伴嘉右衛門、津田甚太夫、久佐彦太夫、西川伝左衛門、原田助太夫、横田惣六、長田三平、福島羽

右衛門、太田兵左衛門、安部長左衛門、野間吉次郎、杉佐八、野間五右衛門、末永作之進、梶原弥

太夫、飯永貞助、藤井利助、藤田文太夫、伴左太夫、原田助之進、津田仙藏

船奉行 松本五郎八

医師 中村周庵

船頭 肥川孫作、村上庄右衛門、藤田長助、吉田清作、白水三平、上杉大吉、小島徳八

凡 例

- 一、本書は、二冊からなり、原題は「魯西亜船渡来記」「魯西亜船渡来之記下」である。
 - 二、本書は、九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門の所蔵されている。
 - 一、翻刻に際しては、なるべく原本の体裁を表すよう務めたが、多少の修正を加えた。平出については一字空けで示した。闕字はとくに示さなかった。日替わりの箇所は一行空けた。
 - 一、変体仮名は、而・茂・江・者・与・夕はそのままとした。
 - 一、本文中に適宜、句点と並列点を加えた。
 - 一、朱書については「」内に表記して（朱書）と注記した。
 - 一、主要人物について適宜人名を補った。
- 【付記】原稿作成にあたって福岡市史編纂室調査補助員の末継明日香さん、九州大学大学院の守友隆、古川祐貴君に大変お世話になりました。



〔魯西亜船渡来記〕（三奈木黒田家文書489）

文化元年長崎表江おろしや船渡来之趣、九月八日昼頃爰
元江相達候間、翌九日出立長崎江罷越候

晴天

一 九月九日福岡出立、前原泊、無別条

右同

一 同十日大川野泊、無別条

右同

一 同十一日彼杵泊、無別条

右同

一 同十二日矢上泊、宮小路二而、長崎去十一日夜差立候
大早飛脚行逢候

一 竹田九郎太夫、去十日夜長崎着、石火矢役・足輕頭、
十一日二掛追々致着候趣申越候

一 九郎太夫上原源市郎申越候者、佐賀開役関伝之丞儀、
源一郎江及噂候ハ、おろしや船繋居候場所より見通二

相成候ニ付、四ヶ所御台場江致幕張置候、右ハ前以御
 噂可申儀ニ候得共、急速之事故無其儀候、承置候様と
 の事ニ付源一郎ハ早速相調子候処、四所共ニ幕張其上
 切組木屋等も掛簾立も立有之趣ニ付、又々源一郎ハ伝
 之丞江出会及噂候ハ、右之通御取計之儀ハ御奉行所江
 被仰立候歟又ハ御同所之御差図ニ依而御取計ニ成た
 る儀ニ候哉承合候処、全先年平賀殿之御差図振ニ依
 て取計候由 此方様ハ御備方ニ相成候節早速取除候由
 相答候、右之通ニ而ハ 此方様御請持場江彼方より御
 武器飾付等有之候而ハ曾而不相濟儀ニ付、御奉行所江
 相伺候而此方様御請持之御非番所早々受取候様ニ可仕
 候哉此段相伺候由申越候間、及返答候ハ手前儀振十三
 日着已前ニ御奉行所相勤早々御非番所受取候様以付札
 申入候、尤佐嘉ハ此方様御持場ニ飾付等有之候儀者追
 而申立候筋有之候間、重疊勘弁候而已後申立候節妨ニ
 不相成候様可被取計旨をも申遣候

同十三日晴天

一 四時長崎着、早速奉行所相勤候筈之處、同日者諏訪社
 祭礼中ニ而能有之、而御奉行例年同所江終日被相越候

一 二付断申來候、就右無余義明日相勤候積ニ候
 感応丸其外惣御番手船々今夕ニ掛追々致着船候

同十四日晴天

一 四時、而御奉行所相勤候、其節吉田六郎太夫方江も一
 同之勤候

一 今夕飯後又々建山江罷出、守衛之役々相揃、於手元ハ
 差間候筋無御座候間湊内何方江御挽入ニ相成候共不苦
 旨申達候

一 守衛之役々夜前迄ニ追々着、右ニ付直ニ御台場江出張
 致させ候

一 同夜佐嘉との受取後、双方彼是隙取、至今朝相濟
 感応丸

九月十一日六時前波止場出船、志賀見掛候而降物有
 之、暫時同所ニ繋ル、八時過ハ同所出船、同夜四半
 時呼子着、少シ北ニ直り候間、八時ハ同所出船、
 終夜通船十三日八時前長崎着、御茶屋下ニ繋ル

青雀丸通ニ拾挺

同九日波戸場子刻出船、十日夜楠泊辺ニ而降物、繋
 船七時前同所出船、十一日八時半時長崎致着候

一 芦丸四拾四挺立

蓬萊丸四拾式挺立

三拾石小早

急用丸二艘七十三

右者感応丸同日二致着

虎丸荷船

九月十日夜八時波戸場出船、同十三日七時長崎致着

浦船四艘

右虎丸一同長崎致着

同十五日晴天

一 昨十四日飛脚差立候筈之處、御用相増同日之日附二而

今晚指立候

一 御台場為見分六郎太夫・立花善太夫一同罷越候

同十六日雨天

一 大早飛脚差立

一 諫早播磨儀速罷越居候へ共、船延着之趣二候処今日致

廻着候由

同十七日晴天

一 守衛之面々速ニ御奉行所相勤候筈ニ候得共、守衛中之

事故早速勤ニも及間敷と遂勘弁致、延引相勤候趣卒度

聞役より御奉行所江申込せ置候ニ付、今日中老・番頭

両人御奉行所江罷出甲斐守様（御出度付）之御口上申入相勤候、

兼而者番頭中相揃罷出候筈ニ相成居候得共、着直ニ御

台場相固メ罷在候儀ニ付、何れも相揃御奉行所江罷出

候而ハ其間固場手薄ニ相成候間、右之通及差因候

一 根本屋所建之儀、聞役善大夫御奉行所江罷出相伺候処、

豊後守殿留守ニ而其儀なく引取、以後彼方より呼出ニ

付又々罷出候処、おろしや船湊内挽引之儀ハ江戸伺ニ

相成居候得共、御下知之程も難計候ニ付速ニ挽入ニハ

相成間鋪旨用人相答候、就右長刀岩陰尾二ヶ所者おろ

しや船々少ハ相隔居候ニ付、根本屋取建之儀翌十八日

九郎太夫呼出委細相達候

同十八日晴天

一 聞役手元々御用有之飛脚差立候ニ付、手許々も御用状

差遣候

一 和蘭陀船（船名茂茂）弘二付肥前守様御越可被成候処、御歯痛ニ而

御越座難被成、依之御同氏左衛門佐様為御名代今日当
所御越被成候

御国去十五日立中早飛脚到着

同十九日晴天

松平左衛門佐様、和蘭陀船（蘭島舟）払二付御番所為御巡見今日
御渡海、御本船五拾六挺立程と相見、次二御通船か供
船六艘、外二急用丸小早船之類相添候

和蘭陀船例ハ二艘入津之節者壹艘者、今壹拾九日相残
壹艘者明廿日湊下二候得共、おろしや船渡来中故二艘
共明廿日一同二湊下二申付候旨、御奉行所を以用人佐
嘉間役関伝之丞江被相達候間、其段同人を源一郎まで
及書通候

同廿日晴天

紅毛船出湊二付間役手元を御国元江例之通飛脚差立及
言上候得共、手元を御用無之候

和蘭陀船出帆と申付候段両御奉行立会二而書付被相渡
候旨源一郎より申出候

関伝之丞を源一郎江及噂候者、先日御奉行所用人を申

開候者船払之御出崎者不申及、此節おろしや船渡来二
付而ハ肥前守様御越可被成儀かと存候由申聞候二付、
相答候ハ先年平賀殿を御達之御二御両家被仰合無別

条候ハ、不罷越候心得二御座候段一通申置候、右者強
而申立候儀二者無之全申捨程二答置候故以後御奉行

所之御答振等承候儀二も無之候、然れとも右之模様故、
左衛門佐様此節之御越座御振合違おろしや船渡来二付
而之御出御兼合二相成候間、其段為承知迄二申述置候

旨伝之丞を源一郎江及噂候与し同人申出候
肥前守様（蘭島舟）兼而者御蘭痛二有之候処、右者追々御快被為

在候得共其後御腰痛二而御立居も御難儀被遊候、然共
頃日者余程御快被成御座候、右之御容体故左衛門佐様
為御名代「御出」被成候由是又心得迄二同時伝之丞を
源一郎江相咄候趣をも申出候

同廿一日晴天

御国去十九日立飛脚到着候而、甲斐守様（奥州大守）秋月今廿一日
御発駕、来廿五日長崎御着之旨申来候、御同方をも御
船飾御武器ハ御用心之ため御持込被成候趣も同時二申
来候

同廿二日小雨

一 聞役手元^〆御用有之中早飛脚差立候間、昨日之便二申
來候廉々御用狀ニ以付札差返候

一 御国去廿日立大早飛脚到着候而、甲斐守様廿五日御着
崎之御日割候処、一日早メ来廿四日大村より御着之趣
申來候

一 番頭中平常ハ甲斐守様御着前御茶屋罷出居候而御奉行
御出之節も御玄官前江出方等有之儀ニ候得共、此節ハ

御台場致守衛居候事故不及其儀旨御国も申來候間、
其段番頭中江相達候

但例ハ御一宿迄番頭中^〆以書狀御機嫌相伺義ニ候得
共、此節者是又不及其儀旨も一同相達候、其節廿五

日頃御台場御巡見可被成旨をも為心得伝置候

一 右御儲御用筋有之御茶屋差間二付、六郎太夫今日^〆当
時町宿被致候

同廿三日雨天

一 陰尾・長刀岩右二ヶ所根本屋致出來候旨九郎太夫^〆申
出候

一 竹中半助父^{元龜}致死去候二付忌中之段櫛橋久左衛門^〆申

出候、就右已後不及遠慮旨以切紙相達候

一 甲斐守様明廿四日大村^〆御着之筈ニ候処、廿二日塚崎
御泊ニ水野殿泊故、差問候趣ニ相聞乍端宿高橋ニ御泊

可被成由ニ而御詮議有之候得共難相調斷申上候、右
之通ニ而者切角御急之詮も無之御事故再手筋之者ニ差

越御詮議有之候処逆も難相調段亦々申出候二付、不得
止事牛津御滞廿四日大村御泊同所^〆廿五日長崎御着被

成候旨、牛津駅より以飛脚申來候

一 甲斐守様御越座ニ付被差越候船々左之通着、磯部長太
夫儀ハ御座船^〆大塚源十郎儀者御通より罷越候、去廿

日波戸場出船候得共波高く通船難成、今津繫船翌廿一
日同所出船ニ而今廿三日長崎着御船組左之通

七拾二挺立

住吉丸

水取船

五拾石壳艘

二拾六挺立

御通船

頭漕

四拾六挺立壳艘

頭漕

四拾六挺立同

碇船

六挺小早同

頭漕

急用丸六艘

右御越座御用ニ而者、差越候御用聞原吉藏今夕致參着候

御国去廿一日立大早飛脚是又夜入到着

甲斐守様御着崎御延引之儀、御供家老宮崎織部（黒田長勢）も以

飛脚申越候付、翌廿四日御旅中まで飛脚差立及返答候

同廿四日

右御着崎御延引之儀沖御番頭江以手紙申入候事

大村御止宿迄御機嫌伺とし而呈書出置候処、一日御延

引相成候付飛脚之節心得ニ而嬉野駅迄罷越御供家老江

相達、返礼今日持込候

九郎太夫儀御用有之明廿五日致渡海候様以手紙申入候

同廿五日小雨

宮崎織部（黒田長勢）が以飛脚、甲斐守様大村駅（黒田長勢）今日弥御着被成候趣申越候条、一通及返礼

但八半時御供揃ニ而御立之旨ニも申越候

昨日佐嘉間役（黒田長勢）源一郎江及書通候ハ、此度甲斐守様御台場之御巡見ニ付而ハ両御番所番頭共何れも波止先江罷出候而御礼仕候心得ニ御座候、尤番船出方之者ハ其儀無御座候、然共不敬之筋無御座様ニ重畳申合儀ニ御座候段申越候故相応及答置候旨一通源一郎申出候

從御奉行所呼出ニ付源一郎儀罷出候処、おろしや人上陸之儀ニ付用人池田庄兵衛を以左之通達有之候

おろしや人何廉と数々願筋有之候得共何分難取上儀而已ニ候処、近來使節之者病氣ニ有之上陸之儀相願候得共、是以難成儀ニ付其儀被仰聞候処兎角ニ病体

風土之氣を受候得者葉給有之趣医師申旨ニ而頻ニ相願、挽入之儀者迎も難被相成儀と奉存候間何れ之嶋

ニ而も一ツ御ゆるし被成下度段相願候故不得止事御聞通ニ而、木鉢郷之内江上陸被差免飯ニ腰掛場程之所を出来候様ニと申付昨日（黒田長勢）右作事取掛今日中ニも

致出来候様被申附置候、尤右之場所江矢来等結廻し

其内歩行等いたす趣ニ御座候、就右警固と申程之儀者無御座候得共付添役人等も夫々被申付置候、右おろしや人昼之内計右之場所江罷越夜ハ本船江帰候趣ニ候、然共前文之次第第二付右之場所江御番方より御方御船三艘御手当有之候様被相達候由用人庄兵衛相伝候

一 木鉢郷ハ先年和蘭陀船離船之節仮木屋等掛り候場所ニ候、全体者鼠嶋御詮議有之候得共最早寒氣ニも趣候得者場所不宜、其上數月乘来候船故作事前ニも相成追々右等之節も木鉢之方ニ候得者都合も宜、旁右之場所ニ相成候旨とも用人及噂たるよし源一郎申出候

一 甲斐守様御付添ニ而被差越候御用勤毛利吉左衛門并長崎間役花房久七と八半時追々着

一 甲斐守様六半時御茶屋御着、依而手前儀御書院屏風仕切之所江罷出六郎太夫江者御玄官より御書院江之御通廊下出方有之候、御帰路御立之節も同様罷出候

一 御奉行御茶屋江御越之節是迄手前江御逢迎ハ無之候得共、此節之事故自然御逢等ハ有之間鋪哉、其節着着服麻上下ニ而可及出会、左候ハ、御立之節付送り無之而ハ不都合之事ニ付旧記遂詮議候処同席衆之例者有之候

へ共手前家之例無之候、然れ共外ニ寄所迎も無之事故猶打返し遂評議候ハ同席付送者御玄関切薄縁迄被罷出候事故、右之所を踏猶御勘弁之上取計候積ニ候処、両御奉行申置ニ而右之沙汰ニも不相至候為後勘置

一 甲斐守様御着為御祝儀御肴一鉢於詰所御供家老宮崎織部まで差出候

一 於御居間甲斐守様御逢有之

一 吉左衛門御付添ニ而被相越候得共、おろしや一件之御用状ニ者名許差除、手前・六郎太夫兩人ニ而御国往反相成候、就右甲斐守様御越座御用筋ニ而兩人者不致加判候、併御用之趣次第不致加判候而ハ難相濟儀者相加り候

一 御国元江御越座御用ニ而大早飛脚差立候

同廿六日晴天

一 甲斐守様御奉行所御勤被成候処、因幡守殿江も於建山（或正定）

一 一同御出会有之候ニ付、西屋鋪江者御口上被仰置候以後御台場為御巡見御出被成候、兼而者手前・并六郎太夫江も御供者不致害ニ候得共、御船数も少、外見余御不都合故兩人共ニ銘々乗船ハ罷越候

一 御帰後御相伴二而御料理被下候

但六郎太夫・吉左衛門江も一同二御相伴被 仰付候、

右兩人江者御次間二而被下候

同廿七日晴天

一 不快二而引入

一 甲斐守様昨日御台場御巡見被成候処別条無之候二付、
（堀田政将）

今日又々御奉行所御勤御引弘之儀猶又被仰入候処、弥

御引取可被成、帰帆之節も御出二者不及旨御挨拶有之

候二付、明廿八日御帰路二被向候

一 おろしや人共今日日々木鉢江揚り、夜者本船江帰候趣用

人池田正兵衛・横山文平より源一郎・善太夫江及書通候

一 明廿八日中早飛脚差立候、此節御帰路二被向候義而已

申越候事故外二入組候御用も無之、為手廻シ今日日々相

仕廻候

一 今夕四時甲斐守様より渡辺此面以御使者御有一鉢被下候、
（堀田政将）

其節不快引入御尋之御口上も相加候、就右取次藤井宅

右衛門を以當時病氣二付御使者江出会御請も不得申上

候、何分二も可然様崎織部迄相頼候段此面迄相答候、

御在着後以書状御容子相伺候間其節右御礼ハ別段呈書

差越候

但此面江者今夕挨拶使遣候

同廿八日晴天

一 今朝御発駕之節頭番以使者御容子相伺候処、物頭土方

彦四郎出会相応御答有之候

一 今朝七時御供揃二而夜明早速御発駕、貝津御昼休二付

同所江御容子為伺御供家老迄呈書差出候

但此節者六郎太夫も伺有之候間手元仕出相止御右

筆申談差越候、右織部より之返礼夜二入持込

一 磯部長太夫儀御越座御用二而御座船より罷越居候処、御

用相済明廿九日出船之筈二候

同廿九日晴天

一 番頭中平常御番之節ハ御奉行所江朔日二者必兩人程致

出方候得共、守衛中之事故啗人罷出可然と遂評議、其

段番頭中以手紙申達候

一 佐嘉間役より源一郎江及書通候ハ、おろしや人共此節木

鉢揚陸之儀從御奉行所江府御届二相成候哉其御儀無之

御座候哉及問合候処、用人を以被申聞者江府江者不被

申上候旨返答有之候、就右佐嘉よりも猶又御届者不仕候、依之為心得相知らせ候由二付 此方様ハ兼而御届之筈二相成居候間、御同様被相控候様二御国元并秋月江も大早飛脚を以申遣候

十月朔日晴天

一 今日ハ出勤吉藏儀寛々罷越候

一 大塚孫太夫御奉行所出方之節同道之善太夫江用人申聞候者、おろしや船損所有之作事之儀追々申出候、依之被遂詮議候処海浅く候而者難相調候、兎角深所二無之候而者仕調不致出来由二付追々紅毛船致出帆候ハ、湊内高崎・大田尾辺迄挽入候方二取計、同所二而作事取掛候趣二候得共未江戸表伺之御差図も隙取可申候、右被相待候而者次第第二波荒く相成候時節故守衛之面々難洩二も可有之、彼是二付近日中先挽直候含二候未佐嘉御方江者御達不申御番所近辺之儀故若彼方も存寄も可差越哉、孰とも佐嘉江御達申候ハ、此方様江も改御達可申候、先任席一通内々申聞候旨用人相咄候趣善大夫ハ申出候、右作事ハ船底之事故船を横二なし候而繕候趣二而凡三十日程も掛候模様二有之段も相咄候由一同

二 申出候

同二日晴天

一 御国并甲斐守様御旅中迄大早飛脚差立候
(黒田長輝)

同三日曇

一 高木作右衛門殿江安否為尋今日善大夫同道罷越、手代小比賀慎八江出会口上申置候、作右衛門殿江者建山御役所出方中二候

一 御国先月廿三日出船用心米五百俵積二而今朝着側筒高津兵助上乘二而罷越候

同四日夜二入風雨強

一 和蘭陀人共惣乗切

一 御奉行所ハ聞役呼出二付源一郎罷出候処、和蘭陀人乗切候故明曉二掛可致出帆も難計候、然二今程おろしや船繫船之場所例者專致通船外々之所者殊外瀬形多通船難成候、依之おろしや繫船之際をも乗通其上御非番方守衛之内をも模様次第可致通船候、就右出帆之節ハ和蘭陀船番船之者ハ何方江も守衛之内二御噂可仕候間其

節差間無之様兼而御達被置候様被存候、唯今和蘭陀人共申出候ニ付乍夜中被相達候旨用人ノ相伝候段源一郎申出候、依之早速其段番頭中江以切紙相達候

同五日晴天

一 佐嘉聞役ノ源一郎江及書通候ハ、此節和蘭陀船出帆已後者大田尾迄迄おろしや船挽直同所ニ而作事取掛候、依之引合ニ及候段奉行所ノ以用人被申聞候、就右大番頭申合候者第一御番所間近ニ有之其上三ヶ所御台場近辺之事故若おろしや人共揚陸等仕候様なる儀御座候而者何分難相濟儀ニ付其段者御奉行所ニ而も御勘弁有御座度、且又乗組之者共ハ何方江被差置候儀ニ候哉彼是前文之趣を以申達候処、用人相答候ハ被仰聞候趣可致承知候容易ニ揚陸仕候而者難相濟事故於其儀者重畳御奉行所ニ而も被致勘弁候義ニ御座候、おろしや人共差置候場所之儀者未相決、猶相極候上又々相達可申由とも相答候、此段為承知申越候由ニ而伝之丞ノ源一郎迄以手紙相知せ候、昨日之日付ニ候段とも申出候

同六日晴天

一 無別条

同七日晴天

一 聞役手元ノ御用有之緩飛脚差立候

一 昨六日源一郎・佐嘉聞役、大徳寺ニ而寛々及出会候間、肥前守様御舌疽之御症ニ付御番御振替之儀於江戸表御留守居共取合之末粗相搜見候処、一旦者舌疽之御症と申趣ニ而何れも致心痛候然共追々御快被成御座以後ハ御腰痛強被為在候、是迎も次第ニ御和被成候様、既二昨日も到来有之候、当表ニ而者拙者拙者共一向ニ存不申候、若左様之筋ニ候得者早速御引合不申候而者不相濟事ニ候、此儀者得度致安心候様相答候ニ付源一郎も申出不都合程之模様ニ有之候而相応ニ取合候由同人申出候、依之今日之飛脚ニ御国元江一名ニ而其段申遣候

一 同八日昼後雨

一 去四日立寛飛脚着無別条

一 朝飯後ノ水浦瀬脇飽浦辺江善大夫・文助・久之丞同道罷越候

同九日晴天

一 和蘭陀船致出帆九時又々高鉾沖江乘戻候

一 御使者同道奉行所江善大夫儀罷出候処、用人横山文平聞候ハ紅毛船致出帆候ハ、今日八時ニも大田尾・神崎辺迄挽入作事等ニ至可申、挽船致出来候ハ、弥八時挽入之積ニ而佐嘉御番方江御達申置候、定而彼方御通達可有之候得共善大夫儀罷出候事故御達申候、おろしや人江も其段被申聞候趣用人の相伝候由善大夫申出候間番頭中江も以切紙相達候

一 斎藤三郎大夫の六半時申来候者、おろしや船御台場前無異儀通船大田尾江致繫船候旨届有之相応及返答

同十日晴天

一 おろしや船無異儀大田尾江致繫船候旨番頭の奉行所江罷出申達候而者重立却而不可然と申合、聞役致出方不差立申達候方たるへくと遂評議、則善大夫罷越其段相届候、且又右挽入之儀者江戸表江被仰上儀ニ候哉卒度及回答候処、用人相答候ハ先右之段江府申上二者不相成候、然共其内宿次立候者模様次第被申上儀も可有御座哉其節ハ從彼方相知らせ可申旨相答候由善大夫の申

出候

一 但おろしや船ニ材木数多積込居候、右之内此節入用無之分ハ木鉢上陸場江揚置度旨申出候、就右其段ハ勝手次第致候様差因有之候、誠ニ番人と申程之儀ハ無之御代官支配之庄屋共の相守候由今明之間ニも取揚可申候ニ付、為心得任席相咄候趣用人も聞候段とも一同善大夫の申出候

一 和蘭陀船二艘共ニ今六半時高鉾致出帆候

一 同十一日晴天

一 不快引入

一 おろしや船挽入紅毛船帆影見隠取来御国江中早飛脚差立候

一 帆影為見隠使番占部忠大夫儀罷越居候処、前条之通帆影見隠候間聞役同道御奉行所致出方候処、豊後守殿江者宿繼到着開封、彼是多用ニ付出会無之、用人を以勝手次第引取候様挨拶有之、依て翌十二日長崎出立罷帰候

一 おろしや船作事追々取掛候模様ニ而帆柱等取除候

同十二日晴天

一 佐嘉開設の源二郎江申越候者、おろしや船繫場御番所至而間近ニ有之候故最前和蘭陀船繫居候場所江ハ繫替被下度番頭共申合候ニ付、其段御奉行所用人迄申達候處、豊後守殿被相答候者尤之事ニ候、然共近比挽置間（能田頼常）もなく繫替と申候而ハおろしや人江対不都合之事ニ候、何れニも彼船修理中人物ハ唐船ニ被乗移候事ニ候其節何となく今少冲江繫せ可申由被相答候、右之趣為心得及書通候旨申越候折柄源一郎不快引入罷在候故善太夫の申出候

同十三日夜二入風雨

一 九郎大夫の取頭を以申出候者、高鉾御台場根本屋取建之儀如何可仕候哉之段申出候条勝手次第可致、兼而六郎大夫方并聞役とも申合置候儀も有之候ニ付、日限等相決六郎大夫手元及引合候様相答候、當時引入難致出会取頭を以相達候

同十四日前夜の風雨強

一 根本屋建方之儀今日御奉行所江源一郎致出方申達候処

被承置候、猶又御領主方江者御通達有之候様被存候旨用人を以被申聞候

一 右之節用人申聞候ハ、先日おろしや船大田尾挽入ニ相成候段来十七日之宿繼ニ被申上候筈ニ候段申聞候由ニ付、源一郎の申達候ハ右江戸表江被仰上振御控候ハ、相願度旨申入候処未下附ニも不相至候、其内下書致出来候ハ、差遣可申段相答候趣も源一郎の申出候

一 白崎御台場之儀ニ付大村之方高村慶藏を以彼方用達之者江及掛合候處、入御念候御事先日御噂有之致承知居候得者御勝手次第可被成由昨日一通答置、其後又々用達之者の慶藏迄及書通候者、地所御引渡申儀ニ付役人共罷出ニ而可有之候、然共若御急被成候ハ、戸町江居申候役人江御引合可被下候段申越候、右役人ハ郡目付位之者ニ有之由名元左之通

横目役

藤田弥六

手付ニ有之候得共同所ニ而ハ庄屋之由

今里勝左衛門

一 梅ヶ崎江挽付ニ相成居候唐船二艘之内壹艘此節おろしや人江被貸渡候由ニ而右場所の今日卸候

同十五日曇

右唐船今日大浦江受出候

一 佐嘉江出会候役々格式等及問合候処昨日昼比二掛從彼方可及答旨申来候得共、無其儀今十五日以手紙申来候ハ石火矢役関政十と申者陣榮方手附兼受持る致出会其外地所存之者も差出儀二候得共御応対者政十相勤二而可有御座候、右役々之者ハ今九時高鉾江差出候趣申来候、就右此方も足輕頭差出可然遂詮議早々其手当いたし候様六郎大夫の九郎大夫江手紙を以被申越候、長崎之方者明十六日受取二相成筈二候

一 御奉行所より聞役呼出二付源一郎罷出候処、用人を以被相達候ハおろしや人江唐船壹艘被相渡候、就右荷物等乗移可申候扱又彼船二石鉄等積居候間右者大田尾より沖手之方ニ宜場所を今日作^{高木}右衛門殿見分之上被相究候、其上二而右場所江揚置候尤相決候迎も別段御達ハ不被申候、守衛之向々為心得相達候旨用人申聞趣源一郎の申出候ニ付其段番頭中江以手紙申入候

一 榎五助儀最前より被差越置候処、絵図も出来候而六郎太夫手元江差出候ニ付今日出立罷帰候

但右絵図ハ六郎大夫帰着之上追而仕立替候方可然と

申合候故先此節下絵図出来之分ハ近便御国元江差遣候

同十六日晴天

一 追々快今日より出勤、六郎大夫被申出候ハ昨日大頭江及書通置候高鉾御台場根本屋地無別条受取候、就右今日の根本屋取建候段昨夜四時過以手紙申出候、此段承置候様被申出候、猶其節も噂有之候ハ白崎之方者今日受取明十七日より建掛候旨とも被申聞候

但高鉾受取候足輕頭白石権右衛門相勤候

同十七日後雨

一 六郎大夫より被申出候者白崎御台場根本屋地昨日申来居る横目役藤田弥六・今里勝左衛門兩人立会足輕頭塩川市助無別条受取候旨昨夜九郎大夫より申出候、其節建方等も早々取掛候趣とも申出候是又承置候様被申出候

一 今日用人より聞役迄申越候ハ、先日御噂有之候江府被申上之下書差進候由二而達来候、右書面之末二呼出之儀も相見候間源一郎出方之筈二候得共、前廉從是も用人迄高村慶藏を以右下書申受為催促差遣置候折柄前文之

通掛合行違候依而慶藏江用人の申聞候ハ、おろしや人共江唐船被貸渡候義者兼而御達申置候然処、おろしや人共申立候者荷物等積替候ニ至候処垢水入何分不都合之趣ニ相聞、依之右仕組ハ先被相止候此段御達可申と存前赴が及通達置候得共、幸慶藏儀致出方候事故同人江相達候、別段聞役衆不及出方旨とも用人相伝候由慶藏の源市郎江申出候ニ付其段聞役兩人の委曲申出候、就右沖番頭中江以手紙申達候

同十八日曇

一 大早飛脚差立候ニ付右便ニ番頭中交代之儀一名ニ而申遺候

一 御国元去十四日立飛脚到着、無別条御番御振替之儀ニ付被差越候人数付従是調子遣候通御国ニ而も存寄無之候間、追々其通取調子ニ相成候趣付札ニ而返來候

同十九日晴天

一 佐嘉聞役兩人の源一郎善大夫江及通達候ハ、先日御達之唐船おろしや船ニ挽付ニ相成候処手狭候由申立候ニ付乗移之儀ハ被相止候、此段被相達候趣御奉行所用人

横山文平の相伝候、就右おろしや人共先打追之俟ニ罷在候、此段及書通候旨申越候由ニ而右書面聞役の六郎大夫江差出同人の今日持參被申出候、尤一昨十七日仕出二候

一 六郎大夫今日文助久之進召連被致遊歩候段被相届候

同廿日晴天

一 聞役手元の御用有之大早飛脚差立候ニ付、六郎大夫の久大夫まで石火矢役之儀内々被申越候

一 高鉾根本屋致出来、白崎ハ明廿一日致成就候筈ニ候、佐嘉一統筈留ニ相成茸方及差間候間當時之処三拾石小早・八挺小早等之筈取用置、追而相調次第元之通取替可申旨九郎大夫の申出候間伺之通承置候

但一統浴用ニ焚候薪、兼而水浦江湯入風折木等有之候ニ付右之分被相渡候様、是又一同申出候間、聞届候

同廿一日折々雨

一 無別条

但於御茶屋密門及出会候、高野之産ニ有之今程実子

讃岐二居候由、七十余年耳不通

同廿二日昼前小雨

無別条

同廿三日晴天

一 御国元去廿一日差立大早飛脚到着、聞役江御用有之差

立二相成候趣故手元江者一通之付札御用而已申来候

一 佐嘉固之模様為見繕、内々ニ而脇山斎次義沖江罷出候

一 今夜半荷船虎丸大田尾着船、明廿四日早朝御茶屋下二

乗込候筈二候

但去廿一日二遅く志賀迄通船、翌廿二日呼子迄罷越

同所々直二今夕着船、至而速二候、六郎大夫殿船も

一同波戸場出船ニ而呼子迄ハ參候得共従同所乗後れ

候由

同廿四日晴天

一 聞役手元々御用有之中早飛脚差立候得共、手元々者御

用無之候ニ付御用状差越不申候

一 御国元去廿日差立飛脚到着、是又聞役手元江御用有之

指立二相成候故手元江之御用無之

但六郎大夫手元江 上之段様御床揚之儀江戸表より

御到来有之候ニ付、同席中初御用人も恐悦申上候

間此許も同様申上二而可有之、則案文とも差越二

相成候間近便呈書を以申上候筈二候

一 六郎大夫荷船今夕五時致着候

同廿五日晴天

一 久保山文助儀今日沖江罷越、斎次同様佐嘉固之模様為

見繕參候

一 一昨廿四日御借船

宮浦天神丸二百八十八石七斗

米四百俵外二水夫共

之衣類百貳拾二丸積越候

一 此節付添二而罷越候足輕共依願致帰国候ニ付木屋江召

呼候名元左之通

松尾源四郎

高宮平藏

府内耳七

吉村忠七

一 六郎大夫木屋江寛々罷越、夫より左之面々当時相住居

候木屋江も見分旁立寄候、聞役手付之者等相詰候役場

一 寛飛脚差立候

一 源右衛門ゝ相伝候 御意之御礼、今便江戸詰合同席六

一 左衛門殿・市左衛門殿まで呈書差越候

一 上之段様御床揚之御祝儀、殿様両御満衛様江は又呈書

を以申上候

一 御役人下向候而おろしや人共若御奉行所江被招呼候節

途中警固等之儀者、御奉行所二而も手当相成可居申候

得共、若御両家間ゝ被差出候様相成候節者差か、り大

二指間可申候間、此元二而も荒々申合候儀二者候得共

御国方二而も取調子有之候様、六郎大夫方ゝ一名二而

今便可被申越旨相達候

同廿九日晴天

一 松森天満宮参詣、直二高木作右衛門殿中嶋馬場江罷越

致調馬候、斎次儀も同道、其外六郎大夫方家頼豊嶋又

太郎・中田重助も召連同所牽せ津屋川栗毛をも致乗馬

候

一 大村家老大村兵部・大村直江・針尾大衛ゝ以書状申越

候者、此節おろしや船渡来二付大浦江固船差出候様

成瀬(正徳)因幡守殿ゝ被相達候二付則差出候、此段相知せ候

趣二候追而承知之旨及答候

同晦日晴天

一 稻佐弁天前より上候而大鳥崎御用地江罷越候、其節六

郎大夫方并御右筆も致同道候

十一月朔日晴天

一 御奉行所ゝ御返札出候二付蒔田源右衛門儀今日出立罷

婦候

一 御茶屋下詰船四挺小早二而沖廻内々見分のため忍二而

罷越候、自分船印引御印計相用、肥川孫作并櫓役小嶋

孫四郎梶取武七召連候

一 出嶋今夕旗竿江灯笼数多灯候、彼方国王誕生日其外加

比丹誕生日等二灯候由右二付夫等之祝儀二而も可有之

趣二候

同二日晴天

一 大塚源十郎明三日出船之儀相達候二付謁候上持参状相

渡候、右之節九郎大夫出席

一 御国去月廿八日立寛飛脚着、一名二而守衛之面々交代

之儀ニ付評議有之候趣申来候

同三日晴天風立

今晩御手船十五夜丸致出船候

大頭・聞役手元々御用有之、中早飛脚差立候

但廿八日付之御用状昨二日相達候儀、計一名ニ付申遣候

同四日 曇折々小雨

同五日五時々晴

同六日晴天

一 中早飛脚差立一名ニ而守衛之役々交代之儀弥数日ニ不相成中交代被仰付候儀差間筋も不相見候旨申遣候、尤惣当ニハ此節御人数高之儀御奉行所より若御尋も有之候節之居り以国元之心得と不引合儀とも有之候而ハ不相濟事ニ付、追而 公義江被仰上候居之处近便申来候様申越候

一 長浜源三郎 御小姓 月次御使者罷越候ニ付御用人中々六郎

大夫方迄申来候ハ、御滴衛様御不例追々御快復被成

候ニ付最前御容体相伺御滴悅被遊候段頭分々奉札来候ニ付、右御使者帰便ニ御請申上候

一 上之段様御達上強被為在候付御剃髮被遊候旨申来、是又呈書差出候

（本藩國司御奉行上江守・義房・世田守候の志）

一 松平摂津守様兼而御病氣被成御座候処御養生無之御叶先月十六日御死去被成候、然ニ殿様御叔父之御統ニ付半減之御服忌被為受候間御国ニ而も鳴物十日普請三日停止被相触候段申来候故、例之通聞役々夫々相達候

但濃州石津郡高須御居城三万石尾張様御分レ、享和元年御家督同十二月從四位少將被任候由

同七日晴天

一 浦方付山内佐左衛門と申者々存寄申出候ハ、水夫余分罷越居候処浦船壹艘二五人充乗組船数四拾四艘罷越居申候、然処段々病人致出来、不致御用達者者国元江差返、代之者追々呼寄候儀ニ御座候、然ニ浦船ハ根元四挺立ニ候得共此節ハ火急之事故乗組ハ五人ニ而忝人ハ手明と見込有之事ニ付、爰元江居付而ハ四人充ニ而者被相濟間鋪候哉、左候得者四拾四人迄者追々病人有之

候而も代之者不呼越候而相濟候、右之通二候得者乍僅御益も相見、四拾四人趣候者早速代之者呼寄候而ハ如何可有御座哉之旨申出候得とも大頭手元切二ハ難及差図、卒度相伺候由九郎大夫申出候、依而同人手元差間模様相尋候処、根元過人之事故聊指間無之段相答候二付則申出通聞届候、併四拾四人越候上二而遠路申遣候而者必差間可相成候間右人数不相成内二見合少前廉申越候様相達候

同八日晴天

同九日同

一 六郎大夫方木屋江罷越相咄候
一 從御奉行所以書付達有之候ハ、天草詰御普請役大河内久兵衛近々出立帰路向候、依而唐銀六駄登候、御領内飯塚宿泊之由則休泊付被相渡候

同十日晴天

一 三郎太夫方ハ不差立噂有之候者、守衛之場所模様依てハ天氣能候共風筋二而ハ何分繫船難相成其節ハ無挽戸

「魯西亜船渡来記」

町杯江入候儀も有之心底不相任候、併致方も無御座候、乍去何とか守衛方等閑之様二も相響甚以難決之儀二御座候、船中之儀二候得者押而之取計も難致、大概者致繫船候儀二候得共、為念相咄置候由被申出候

同十一日晴天

同十二日晴天

一 從御奉行所呼出二而善大夫致出方候処用人申聞候ハ沖守衛之船之櫓立等何程二候哉承度旨相尋候故、相答候ハ覚之処申述候而も自然相違之儀有之候而も難相濟得と相調子候上可申出候由申候処、用人立入無程又々出会申聞候ハ、其儀なく者得と御調子之上可被仰出候右之通申達候ハ未致治定候得共おろしや人共頻二船作事之儀申立候二付唐船被貸渡候処差間有之不相調、然者倭船二而も可被貸渡候得共是逆も差間有之不相調候、依之梅ヶ崎昆布藏少々致手入等候而使節之者外二付添之者とも三拾人程も致上陸船ハ是まで之所二被繫置候、就右番船等之儀者御当番方より御固被成候様御達申儀二御座候、向地ハ其御元様御用地も有之事故沖守衛之

内より右場所御固被成候様被存候、寔ニ空船同様之事
ニ付守衛之船御台場江者一ヶ所三艘充も有之候ハ、其
内々壹艘充御引被成候而向地御固ニ被取用候而可然、
若夫ニ而及不足候ハ、沖一ヶ所共ハ御引被成候共苦間
鋪候、弥之処者改其内御達可申候得共先内分為心得申
達候旨ニ付善大夫相答候者、委細致承知候前ニ被仰聞
候、船々槽立等之儀者矢張相調子可申上哉と猶相尋候
処、右者其内被仰知候様致度段用人相答候趣善大夫
申出候

去十日立大早飛脚着、九郎大夫手元ヲ追々申遣置候御
旗十流来候

上原源一郎此節之一件初発ヲ承掛居候間落着迄ハ詰越
被仰付候方可然と遂評議其段六郎大夫ヲ久大夫手元迄
卒度申越相成居候末、表立手前ヲ其段相達候様申来候、
其外一通之付札等一名ニ而来候

但六郎大夫手元江ハ先便申越被置候日田表江被差遣
候御人数書来候

同十三日晴天

昨日從御奉行所御達之趣ニ付水浦・大鳥崎武器飾方等

之儀ニ付為見分罷越候、就右左之通相越候

吉田六郎大夫

竹田九郎大夫

立花善大夫

御右筆三人

足輕頭聞次

白石權右衛門

塩川市助

石火矢役頭取

津田甚大夫

山口進三郎

高村慶藏

昨日善大夫江達之末沖守衛之船数其外御茶屋下繫船之
分并此節水浦江引分候而固ニ相成候船組書付都合三通
共ニ今日源一郎ヲ用人迄差出候処、全体余分之御船数
ニ有之候段挨拶之上三通共請取豊後守殿江相達可申旨
ニ而立入、又々出会申聞候者おろしや人共来廿六日梅
ヶ崎江上陸申付くれ候積ニ付、御手当致出来候ハ、明
後十六日改一統御達申儀ニ付兎角速ニ相調候様有之度
候、右御船飾之模様御幕張等ニ相成候地名等をも申出

候様申聞候故相応相答引取候段源一郎の申出候

右之節用人相嘶候ハ、若又十六日雨天之節ハ日送ニ相成候趣をも申聞候由

同十四日雨天

一 左之通呼出之上申渡候

上原源一郎

其方儀当秋交代前二候処、おろしや船渡来ニ付而者別而御用向多初発の承掛候儀故太儀事二者候得共、右船落着迄者相詰候様被仰付候弥入念相勤可申候事

前日以切紙呼出置今日於表座鋪相達候

櫛橋久左衛門

其方儀是迄陰尾御台場守衛被仰付置候得共、此節おろしや人梅ヶ崎昆布蔵江上陸被仰付候ニ付水浦御茶屋江御人数船等指出武器飾等いたし候様内分御奉行所相達候、就右其方儀水浦御茶屋守衛被仰付候間是迄御台場守衛之通相心得乗船武器飾等いたし事々嚴重作法宜守衛可相勤候事

但達方前二同

馬杉喜右衛門

「魯西亜船渡来記」

櫛橋久左衛門是迄陰尾御台場守衛被仰付置候得共、此節おろしや人共梅ヶ崎昆布蔵江上陸被仰付候由ニ付久左衛門水浦守衛被仰付候、依之其方儀陰尾御台場番頭

助被仰付候間弥入念嚴重守衛可相勤事

但呼出之儀ハ久左衛門迄以切紙申入右御用之節ハ同人江も出席候様相達候

一 大頭江左之通以書付相達候

則木文次郎

浦上利太夫

長野三四郎

細江十左衛門

足輕頭

右之面々は迄御台場守衛被仰付置候得共、此節おろしや人梅ヶ崎昆布蔵江上陸被仰付、水浦御茶屋江御

人数船等指出武器飾等いたし候様内分從御奉行所被相達候、就右水浦御茶屋守衛被仰付候間是まで御台場守衛之通相心得乗船武器飾等いたし事々嚴重作法宜守衛可相勤候事

一 右之通ニ付久左衛門九郎大夫心得之儀頭付を以左之通相達候

一久左衛門江水浦御茶屋守衛之面々差向候義者遂才判

候様、惣而之儀者九郎大夫可遂宰判趣とも相達候

一 右之趣九郎大夫江も相達候

一 同人江水浦船々才判之儀ハ松本吉郎大夫受持候様可
申合段及差図候

一 御台場守衛之船々之内四拾式挺立式艘・三拾八挺立

二 艘・八挺小早二艘・急用丸壹艘水浦御備船二取用
候趣、九郎大夫江及口達候

一 御台場守衛之足輕之内より水浦江も取用二相成候趣
も九郎大夫江相達候

一 水浦固二付沖守衛之内より人数船等取用二相成候儀、

三 郎大夫・孫大夫不致承知候ニ付一通為心得迄連名ニ
而申入、猶委細ハ九郎大夫江相合候趣をも相達候

一 御奉行所ニ而用人申聞候、水浦繫船武器飾并御幕張等
有之候地名之書付差出させ候積ニ而六郎大夫源一郎

江被相渡候而既ニ差出候心得二候処、從御奉行所呼出
有之佐嘉・大村申合一同ニ致出方候様との事ニ付、旁

無程罷出候処用人申聞候ハ昨日内々申聞候末表立相達
候由前日之模様ニ而ハ表立候達ハ明十五日可有之様ニ

一 相聞候得共、今日之達ニ相成候ハ御奉行所手繰之儀ニ
も可有之哉、上陸之儀も明後十六日之様ニ相断居候得

共来十七日上陸之筈ニ候由、同時佐嘉江ハ海手固之儀

相達大村江者陸地固之達有之候趣ニ候、就右源一郎よ
り相尋候者、昨日来之御模様ニ候得者表立御達有之候

以後手当向相調候旨申上候様被仰聞置候、右者如何相
心得可申哉と及問合候処十七日之揚陸之儀ニ付此方様

二而兎角御都合次第明日ニ而も又十七日朝之内ニ而も
幕張等致候共御勝手宜様可被成候、右相調候趣ハ別段

申出ニ者不及との義用人相答候段源一郎より申出候

同十五日晴天

一 大早飛脚差立候ニ付一名二者六郎大夫方水浦繫船之儀
其外櫓橋久左衛門足輕頭をも取用馬杉喜右衛門番頭助

被仰付候趣等委曲申遣候、上原源一郎儀詰越被仰付方
も相済候段彼は申越候、尤申渡書も夫々差遣候

一 惣当御用状二者頃日追々相免居候廉々取調子之趣申越
候

同十六日晴天

一 六郎大夫方々卒度申出有之候ハ、水浦繫船中御茶屋江
往来ハ忍之形ニ而小早船ニ而通度段被申出候ニ付其通

承置候

御石火矢積来候船去朔日御国出船昨十五日神嶋着、小船頭藤田長助今日六郎大夫手元まで御用人中々之書状箱差出候、且又此節者津田甚大夫父仙藏儀依御詮議被差越候間一同罷越候

但御石火矢貳拾二挺・合葉四百斤玉六百余来候二付、直二追々夜中密二長刀岩後之入江二而、四ヶ所御台場艀二夫々御定之通六挺充積込合葉ハ水浦御藏二入候

○右船二糯米五百俵積込側筒山崎孫六と申者上乘二而罷越候

○朔日出船之筈候処天氣不順二而四日迄波戸場滞船、夫より出船候処又々通船難相成藍嶋江繋船、去ル十一日より追々通船昨十五日致着津候

一 佐嘉間役々源一郎江及書通候ハ、上陸之場所為見分おろしや人とも朝之内梅ヶ崎江罷越候由從御奉行所被相達候、此方様江者前段御達不申候間拙者々致御通達候様との儀も被相達候、尤おろしや人共乗船ハ佐嘉々差出候様是又御達御座候段申来候

一 左之模様二付水浦固船々揃次第今夕より罷越夜明早速

致船飾等候様六郎大夫々久左衛門江被申合候、依之九郎大夫江も是又武器飾等六時二者相調候様以手紙申入二相成候

同十七日晴天

一 魯西亜人梅ヶ崎江八時比揚候、佐嘉御方二而ハ御座船二乗組候而罷越大浦ヶ御通船二乗せ移昆布藏江揚り候但從御奉行所追々達之通御三家ヶ嚴重二固有之候

一 水浦・大島崎御飾等出来之儀九郎大夫々六郎大夫江時刻無相違六時前程二申出候二付、早速源一郎ヶ御奉行所江相届候

一 今日ヶ御茶屋下惣幕張三ヶ所御門江高桃灯燈夜廻致させ候

同十八日晴天

一 今日御奉行所江致出方申述候ハ、昨十七日魯西亜人共梅ヶ崎上陸被仰付候二付先日ヶ追々御達之趣承知仕候、弥別条之儀も有御座間鋪候得共、以後御安否も不承候二付彼是為相伺候罷出候段用人横山文平を以申入候処、(肥田常)豊後守殿被相答候者御口上之趣致承知候、如仰昨日お

ろしや人十五人程致上陸愈別条之儀無御座候、其節者御番方嚴重ニ有之大慶被存候、掛御日候而申述候筈御座候得共因幡守殿被相越御用談中之儀ニ付乍御無礼以用人及返答候趣ニ候

一 御国元江大早飛脚差立、昨日魯西亜人上陸之模様且今日御奉行所相勤候趣等申遣候

但御奉行所今日江戸江宿繼被差立候ニ付、右被申上振書取兼而源一郎が用人迄乞置候處、今日達来候間是又同時御国元江差遣候

一 大庭市右衛門儀致乱心候、委曲取頭手元江有之故相省候

同十九日 暴風強夜二入雨

一 御奉行所が呼出ニ付源一郎儀罷出候處、家老西尾儀左衛門并用人杯出会之上豊後守殿対面被申聞候者、魯西亜人共一昨日上陸被申付ニ付向地御固之儀被相達候處、別而御嚴重有之異国人共見受候所も宜殊ニ速相調彼は大慶被存候、且又此節之儀類ニ隙取候付而ハ何卒速道付帰帆等被申付度被存候得共江府が之御下知無之冲守衛之役々嘸可為難儀と被存候、若相痛候面々等者無之

哉兎角相厭候様との趣被申聞、其後豊後守殿江者被立入同間ニ而西尾儀左衛門申聞候ハ江戸表が之御下知有之候得者一兩日振ニハ魯西亜人御奉行所におゐて被致対面候、就右道筋固之儀ハ御当番方江も可被申談候得共、御宿町分ニ而此方様も御固ニ可相成一町々々ニ番所等取建、物頭式人尤も被差出足輕三拾人程其外長柄鎗十本鉄砲十挺弓拾張被差出兼々有来候番所之様ニ仕構被置度、右之場所者町家江相応ニ仕構候見込ニ御座候、則繪図等を以引合猶乙名石本幸四郎江相含置候間重畳引合可申、右場所者と見分と申候而者重立候故誠ニ通掛ニ見繕候儀者不苦候、兎角佐嘉御方江も得と御引合可有之旨申聞、以後御固別而速ニ被相調豊後守江も甚以大慶被存、呉々御嚴重之御事共被申儀御座候由儀左衛門が及噂候段從源一郎申出候

一 就右今夕御国元江大早飛脚差立候而足輕頭六人・足輕九十人其外御武器等急速被差越候様申入候、尤右足輕頭ハ御領内ニ而御取扱有之候御方々御通行之節先乗等之行粧ニ而可被差越、依之場所出方之節騎馬ニ而被差出候都合故御貸馬をも差越相成候様惣当り御用状ニ申遣候

但本文之場所建方之儀ハ足輕頭・間次江申談候而も、町家之儀ニ而此上不都合ニ有之、聞役之宰判も同様之儀ニ付御用聞扨人・普請奉行扨人一同ニ早々可被差越、尤暫相滞候心得ニ而罷越候様可被仰付、且御武器数等者委曲九郎大夫同役中江申越候様相達置候段も申遣候

同廿日晴天風立

御国去十五日立寛飛脚着、付札ニ而守衛之役々弥交代被仰付候間其段三郎大夫初番頭中江相達可申、石火矢役ハ不殘参居候事故直二居残被仰付候段も九郎大夫之相伝候様可申聞旨申来候ニ付、明廿一日三郎大夫・九郎大夫致渡海候様申入候

於御奉行所昨日源一郎迄被及噂候模様ニ付而者、番頭中間扨人為挨拶明日ニも致出方様是又申入候

殿様之安否御尋被成、御打せ之鴨二羽被下候段、御用人之奉札達来候

同廿一朝飯後折々雪

三郎大夫・九郎大夫渡海有之候間守衛之面々及数日、

「魯西亜船渡来記」

右ニ付交代被仰付候其心得有之候様相達、尤惣御番手中江も同様可相達段をも申聞候

但番頭中何れも一同相達儀候得共、專守衛中之事ニ付右兩人江相達候条、夫々相伝候様扱また石火矢役、迎も同様交代可被仰付候得共不殘被差越置候事故、其儀なく直二居残被仰付候、其心得候様可相達旨九郎大夫江是又申聞候

同廿二日晴天

御奉行所之呼出ニ付源一郎罷出候処、兩御奉行列座ニ而被申聞候者江戸表之御下知昨夜相達、魯西亜人共先年被相渡置候信牌も持渡愈無異儀候条嚴重之固不及右船も明日湊内挽入之積ニ付、沖四ヶ所御台場守衛等ニも不及船々も武器飾相止引払可申候、御当番方之者番船少々被差出何方も夫々引払可申、此方様江者水浦其外大島崎も幕張并船々武器飾等相止全体ハ唯今之通被成置候而少々相減候儀ハ不苦候、兎角通不申候様可相心得旨被申聞、猶委細者家頼之可申談由ニ而其後用人之同様之趣申達候由

右之趣ニ付源一郎之用人江及回答候者、魯西亜船湊

内江挽入前夫々取除候儀ニ可有御座哉右等之義如何
相心得可申哉相尋候処、用人相答候者彼船引入後ニ
取除候ハ、其際も付可申候間其通相心得可然之旨申
聞候由源一郎より申出候、就右夫々手筋江其段相達
候

一 沖守衛之役々江も以手紙申入候、九郎大夫江ハ六郎大
夫ハ呼出之上事々不都合之儀無之様被相達候

一 六郎大夫同船ニ而水浦・大鳥崎其外梅ヶ崎固之模様為
見物忍ニ而罷越候

一 今昼着船之唐船壹艘湊内挽入ニ相成候

同廿三日雨天

一 昨日来之模様御国元江大早便ニ而申越候

一 魯西亜船九半時大浦江挽付ニ相成候、依而所々固者引
候、尤漕船者佐嘉御方ハ被差出候

一 昨日着之由ニ而唐船壹艘又々挽入相成候

一 水浦繫船之内六郎大夫船々三艘是又今夕御茶屋下江引
候

同廿四日晴天

一 番頭中昨日御台場引弘御茶屋下ニ致繫船候旨御奉行所
江為相届候、何れも罷出候得共久左衛門儀者痛所有之
不致出方候、頃日御奉行所ハ此節之引弘被相達候節ニ
御兩人列座ニ而被申聞候故、西屋鋪江も罷越候方たる
へしと遂評議、兩御奉行所共ニ番頭中相動候

一 以後手前致出方以用人申入候ハ、おろしや人共先年被
相渡置候信牌も持越、相願候趣意も粗被相分候ニ付昨
廿三日右船湊内御挽入ニ相成、依之沖御台場守衛之役々
引弘候様御達ニ付夫々右場所引弘浦五嶋町屋鋪下江致
繫船候、右ニ付役々如何相心得可申哉為相伺候、罷越
候由申入候処豊後守肥前守殿江可申達由ニ而立入無程罷出申
聞者御口上之趣致承知候、押付懸御目可被申旨申聞退
去無程豊後守殿対面有之相応之挨拶之上被申聞候者江
府之御下知ニ依而御台場警衛ニも不及引弘之儀御達申
候処、夫々被引弘候段被仰聞致承知候、數日之繫船風
波等烈鋪節ハ嘸々難儀可有之と被存候忤之噂ニ而役々
心得筋之儀者何たる達も無之ゆへ又々申述候ハ唯今相
伺置候通守衛之役々最早国元江差返儀ニ可有御座哉又
ハ只今之場所江繫船為致置儀ニ候哉相伺候旨申候処、
豊後守殿被相答候者最早御台場警衛ニも不及夫々引弘

相成候程之事故勝手次第帰船有之可然候、若異変之儀も候ハ、御人数之儀可申達候、弥此先ハ異儀有之間鋪全体是迄ハ別条も無之御互安心之事ニ御座候段噂有之候、就右相応之及答致退去候

一 右出方中用人ヲ善大夫江申聞候者幸之儀ニ付御達申候、水浦船々今少も被減候而三艘之外ニ小船之分少々被差置候而も苦間鋪候、左も無之而ハ差間可申其分ハ宜御座候尤番船となく非常為手当ニ候間其通相心得候様との趣申聞候

一 右之趣ニ付番頭中呼出勝手次第致帰船候様久左衛門儀者痛所ニ而未罷出候ニ付各より被申達候様相達候、然共何廉と外二者御用も候条五六日ハ出船見合候様猶從是も相達候、水浦江者は迄よりも又々御船致減少番船となく非常為手当三艘程も被差置候様との儀ニ付各間忝人其外足輕頭石火矢役ヲも被残置候右ハ別段相達儀ニ候得共先其旨相心得御番手中一統相達置候様ニ申聞候

一 右筆ヲ又々九郎大夫呼出相達候者、唯今一統相達候様ニ水浦為固御人数船少々被差置候、依之其方儀直ニ居残被仰付候、其心得候而足輕頭石火矢役名元等取調子

可申出候、船組等之儀者委曲六郎大夫より可申談候其旨相心得候様相達候

一 馬杉喜右衛門呼出申聞候者、先日御人問ニ依て其方儀番頭助被仰付置候得共最早御用無之ニ付右助御免被成候段相達候

一 久左衛門儀未引入罷在候ニ付右喜右衛門儀番頭介御免被仰付候趣以手紙相達候

一 從御奉行所達之趣ニ付而ハ今日より御船減不申候而者難相濟其段も久左衛門江申遣候、猶委細之儀者六郎大夫ヲ九郎大夫江申談相成居候間其心得候様是又及書通候

一 守衛之役々引払候様との事ニハ候得共自然帰帆之節又々固等有之儀候哉左様之儀ニも候ハ、内分手繰之評議も有之事ニ付源一郎御奉行所江差出用人池田庄兵衛迄申入候処相答候者江府御下知ニよつて守衛之面々引払之儀御達為被申事ニ候得者帰帆之節迎も曾而固等無之御事と存候、然とも為念自心得ニ而卒度豊後守殿（龍田殿）江申達内存承候上ニ而相答可申由ニ而立入無程罷出申聞候ハ豊後守殿江も同様之存寄ニ御座候、此節右之通御達申候儀ニ付又々帰帆之節訖度御固等有之様ニ而ハ

甚以不都合之事二而曾而無之儀と被存候然とも江府之御模様得と不相分候得共此先如何之義二可至哉表立はきと御答者難申候、水浦二三艘程被差置候船々之内二も相応二御人数被竈置候事故若此先非常之儀二付御固等二相至候節ハ夫二而被相仕廻候見込二候守衛之御役々事もなき二候暫之滯船者無用之儀二被存候、就右先者無之事と存候而可然段庄兵衛ノ申聞候由

但庄兵衛全咄之様二及噂候ハ、惣体九月廿日船弘已後ハ湊内江挽入之儀者兼而不相成御答出候、此節連も曾而挽入之儀者無之事と被存被相伺候処兎角穩二取計可申由二而湊内挽入候様との趣事々江府之御模様不相分義二有之候由相咄段源一郎ノ本文一同二委曲申出候

一
就右御国元江大早飛脚差立前条之趣申遣、一名二ハ守衛之役々引弘之儀喜右衛門番頭助御免并九郎大夫居残之儀等呼出相達候趣申遣、次二者御宿町番所御用之役々被差越候迄ハ御番手之面々御茶屋下二繫船候様取計候、扱又兼而右役々交代被仰付候段既二夫々相達置候得共斯引弘之儀御奉行所ノ被相達候上ハ代之面々被差越候二不及候、水浦固之面々も同所ハ波荒之場所二も無之

候二付先不及交代自然隙取候模様二候ハ、又々代之儀可申進候間其節代被差越候様との趣等申遣候

一
切組木屋解除之上御両家兼而申合せ通、戸町波止先二而今日石火矢役ノ佐嘉御番手被引渡候

一
長刀岩・藍尾御台場江根木屋取建候節者、佐嘉役人立合二も不及儀と此方二而者兼而相心得居候二付不及引合二も取建候処、其後佐嘉二而者不同意之模様二而高鉾根本屋建方之節ハ彼方役人立合度趣頼二申立候、然共此方二而者左様之筋二有之間鋪根元御番方御当非者年々御請持分り二相成候得者右之御奉書出候而より後ハ御非番年二異国船致渡來候得者右場所者御自由二被成候儀と相心得其度之地所受取渡等之論可有之様も無之儀と被存候得共、彼方二而ハ左様之心得二無之其度々致受取渡候儀と相心得居候模様故歟唯々頻二六ヶ鋪申立候趣二付兎角御間取候取合二可相成候二付以後之処ハ示談之道も可有之儀故先此節之所者佐嘉望之通高鉾之地面双方役人立会受取候、就右此節地所差返候ハ猶更之事二候間最前之通役人差出可被受取是よりも役方之者何時差出御渡可申候哉との趣源一郎ノ佐嘉聞役江及書通候処、初メ之振合と違右書面二致付札相答候ハ

右地所相變儀も有御座間鋪木屋等取除候ハ、跡者其俣
ニ致置不苦候役人等者指出申間鋪由申来候間引渡被不
及手数ニも相済候

白崎ハ大村領ニ付根本屋取建之節佐嘉立会之振合ニ準
戸町在役之者立会候而受取渡いたしたる末ニ付、差返
候節も同様ニ可取計旨聞役大村聞役江及引合候処初
之通戸町在役之者立会候而今日差返候

同廿五日曇

水浦江被残置候足輕頭石火矢役名元差出候間左之通書
付を以九郎大夫江相達候

鉄砲大頭江

足輕頭

白石権右衛門

塩川市助

石火矢役

津田甚大夫

横田惣六

御台場守衛之面々此節婦船被仰付候得共右之面々ハ
被残置水浦守衛被 仰付候条、御台場守衛之心得ニ
而入念相勤候様可被相達候事

十一月

一 最前水浦守衛被仰付置候面々ハ御免之儀左之通相達候
鉄砲大頭江

則木文次郎

浦上利大夫

長野三四郎

細江十左衛門

右之面々は迄水浦守衛被仰付置候得共此節白石権右
衛門・塩川市助・津田甚大夫・横田惣六江同所守衛
被仰付候間、守衛御免被成婦船被仰付候条右之趣可
被相達候事

十一月

一 右交代いたし候儀者久左衛門・九郎太夫交代之節一同
相仕舞候様及口達

一 久左衛門江以手紙申入候者、水浦守衛被仰付置候得共
此節守衛之役々婦船被仰付候間同所守衛者九郎大夫儀
被残置候、依之婦船前同人と致交代候様申入候

一 石火矢役左之通此節為自分陸路罷歸度旨横折を以相願
候段九郎大夫申出候ニ付則聞届候

津田甚大夫

久佐彦大夫

西川伝左衛門

長田三平

太田兵左衛門

福嶋羽右衛門

野間吉次郎

杉佐八

末永作之進

梶原弥大夫

飯永貞助

藤井利介

藤田文大夫

但甚大夫儀者被残置候事ゆへ右聞届候内ニハ差除候
段をも九郎大夫江及口達

御国去廿日立寛飛脚到着、一名御用状ニ漂流御手當之
儀壹番手之分ハ当月より改候而宜旨中老中申出候、
然共式番手之分者下々細々之所ニ差聞候筋も有之当月
迄者是迄之通ニ相成居申候其内相調候ハ、可相達候得
共手前儀も留守旁先是迄之通ニ相成居候条為心得被申
越候由、扱又付札二者魯西亜人致上陸候ニ付水浦御固
等相増候間大組番頭介被仰付候趣致承知左候得ハ先

便一統交代之儀被仰付置候処ニ差聞共ハ無之哉若聞之
筋も候ハ、可申越候得共其俣ニ而為何義も無之候故差
聞者有之間鋪と存候、就右仕廻出来候半者近々乗船被
仰付筈ニ候此段ハ為念申遣候由惣当り御用状ハ無別条
一通之付札ニ候

九郎大夫江不差立申聞候ハ、先日一統交代被仰付候段
相達置候処不図此節模様違ニ而速引弘相成候事故右代
被差越候ニ不及段御国元江申遣候、其方江ハ水浦居残
被仰付候事ニ付矢張交代も被仰付儀ニ候得共御台場と
違波着之所ニも無之候条當時交代者不被仰付候、尤此
先暫之滞船ニも相成候ハ、其節ハ代可被差越候得共先
當時ハ無交代ニ相心得候而足輕頭江も不差立相達可被
置候

中老番頭中兩御奉行所江今日為暇乞致出方候

但其節聞役申達候者、今日為御暇乞罷出候得共沖
暫之繫船ニ而作事等も致出来候間、當時者屋鋪下ニ
而右等之儀坏相仕廻度候ニ付繫船可仕候、扱又櫓橋
久左衛門儀も今日一同罷出候筈ニ候得共當時病氣ニ
而出方不仕候、彼是此段申上置候旨相達置候

御国元去廿三日立大早飛脚着、一名御用なし皆付札也、

御宿町番所人数之儀申遣候飛脚同廿二日致着、同日御用聞人普請奉行壹人・足輕頭六人・同組七拾人其外御貸馬夫々差立候由、余者聞役手元江御答勤等之儀申来候

一 今夕四時御用聞原吉藏着、御国ハ去廿三日晚出立之由、全体者廿二日出立被仰付候由ニ候得共差向候事ニ付彼是日間取右之通廿三日晚致出立候趣ニ候、持参状壹箱差出候、右書面無別条從是申越置候役々一同ニ被差立候由ニ而右名付来候得共足輕頭未着不致候条追而着之上名元ハ相記候、根本源七儀者吉藏一同ニ致着候

同廿六日晴天

一

佐嘉聞役源一郎木屋江罷越申聞候者、(佐嘉聞役家藏同格)諫早播磨儀ハ此

節魯西亜一件ニ付致出崎居申事ニ付所々固等も引候事故最早当津引弘之儀申立候而も不都合之儀も有之間鋪候哉御奉行所家司西尾儀左衛門江卒度及問合候処、随分申立相成候而も不都合者有之間鋪旨相答候得共手前も参居候間可致如何哉模様内々源一郎迄及問合候趣ニ付、先同人相答候者只今引弘候儀二者無御座守衛之役々者引弘候共源左衛門儀者今少し御仕法付候迄ハ相詰候

心得ニ候得共猶又相調子候上可及答段一通申聞置候旨源一郎より申出候、就右弥御道付ニ相成候迄相滞候趣佐嘉聞役江猶及返答候様源一郎江相達候

一 御国去廿四日立大早飛脚着、一名二者当夏洪水ニ而稻植付難相成所も有之其上損毛之村々も有之損毛高米式万五千俵余之儀ニ付諸士中江も御掛可被成候得共近年一統ニ難洪之時節ニ付格別之以御詮議御掛不被成候、依之其段去廿三日年番六大夫殿より於大書院中老初諸役人中江被申渡候ニ付為心得右書付来候一統御掛被成候得者百名ニ付式俵九升程之由

一 惣当二者此節水浦・大鳥崎御固之儀并町筋固之儀者先年平賀殿・高尾殿江御当番限御取計被成度旨被仰立置候趣二者不引合候間、其旨御奉行所江相響候取計方ともハ有之間鋪哉之旨申来候

同廿七日晴天

一 久保山文助儀此節滞崎中御内用取調子筋六郎大夫より達有之候様申談則達ニ相成候
一 被差越候足輕頭六人今七時迄ニ左之面々致着候

浦野半平

国友左門

吉田作之進

伊藤八大夫

桐山孫大夫

江田源大夫

足輕七拾人者追々致着

一 夕飯後作右衛門殿馬場江罷越候

同廿八日晴天

一 守衛等も引候事故被差越候御筒入用も無之候ニ付忒拾
二 挺之内九挺被相殘置余者積來候御船二積込、上乘者
藤田長助ニ申談候而明廿九日出船之筈候、依之六郎大
夫御用人中まで持參狀被相渡候

同廿九日雨天

一 今夕唐船式艘入津

同晦日晴天

一 唐船壹艘入津

一 今夕栖崎へ一和田六之進勝野吟平佐伯兵右衛門致着候

十二月朔日折々霰

一 大早飛脚差立候ニ付最前申來居候御當番・御非番入受
無之様先年御議定ニ依而此節於御国猶評議之趣申來
居候末猶又長崎ニ而申合候次第委曲申遣候

但一名二者付札御用狀壹通差返候

一 九郎太夫今日水浦江乘廻久左衛門と致交代候

一 右交代相濟其後御茶屋下致繫船候段以手紙相届則承知
之趣及返答候

一 和蘭陀屋鋪旗竿ニ今夕又々燈籠出候

同二日晴天至而寒強

一 聞役手元御用有之緩飛脚差立候
一 先月廿八日御国立之中早飛脚着、追々參込之御用狀夫々
承知之旨一通之付札ニ而返答申來候

一 右便二甲斐守様より御書被下、此節おろしや船渡來ニ
（重田左衛門）
付御台場守衛等速ニ相調嚴重之趣御奉行所ニ而沙汰有
之候段御承知被成御大慶被成候、手前儀何廉致心配候
儀と思召候、依之御書被下候弥入念相勤候様との御事
二候、六郎大夫江も同様被仰下候

一 今夕又々出嶋江燈籠ともし候

同三日晴天

一 三郎大夫・久左衛門・孫大夫呼出候而最早御用相濟候間明日出船有之候様相達候、尤御番手中江も同様二達有之候様是又相達候、三郎大夫江者持參状相渡封箱入組二者無之

一 九郎大夫支配候様被仰付置候面々船中久左衛門江致支配候様相達候処、同人申出候ハ最前御国元乗船之節も用心金貳貫目、大頭手元〆受取来候得共入用無之当津着之上九郎大夫手許江預証文共ニ差返置候、然ニ又々自分二船中支配之儀被 仰付候ニ付右用心金被相増候而三貫目程も被相渡候様有之度段申出候時節柄船博之儀も有之候故何卒右之通被仰付被下候様類ニ申出候、無余儀次第二付申出通承届候旨及差図九郎大夫・吉藏江も同様之趣相達候、根元大頭手元ニ受候用心金之儀故矢張此節も吉藏手元〆九郎大夫請取、其上ニ而久左衛門江相渡候様相達候

一 九郎大夫江も此節船中筋同人支配之面々久左衛門江支配被 仰付候間、御目付以下之面々江も其段相達候様申聞、自分陸地罷帰候面々も同日出立候様可申聞旨九郎大夫江相達候

但三郎大夫・久左衛門・九郎大夫・孫大夫何れも同

日呼出之儀前日以切紙申入候

一 諫早播磨儀今日九半時当津致出立候、依之善大夫木屋江參致透見候、同人引弘候儀ハ彼方聞役〆源一郎迄相知らせ候

一 御国元去朔日差立大早飛脚今夜半着、一名御用状無之惣人数調子出来之由ニ而帳面一来候、都而御扶持方を以調子有之候御人数ニ付御扶持方高より相増候而召運候も内場ニ召運候も同様之儀ニ候、右之通御扶持方高を以之調子ゆへ現人数〆之多方ニ候

惣人数三千百四拾壹人

同船数百五拾五艘

一 六郎大夫内儀先月廿九日出産有之、血忌相残居候ニ付引入候段今夕以手紙届有之候条致承知候段一通及返答候

同四日昼後雨

一 守衛之面々六半時出船

一 六郎大夫血忌引入ニ候得共御用差問ニ付不及遠慮出勤可有之旨以手紙相達候処、御請以後為御札木屋江被參

一 玄官まで口上被申置候

同五日雨天

一 唐船壹艘入津

同六日晴天

一 御国去四日立大早飛脚着、一名御用状無之御宿町番所御用之御幕不足分差越相成居候様御用聞〆同役中江申遣、猶六郎大夫〆も被申越置候未返答、一同二御幕も今便来候

同七日晴天

一 六郎大夫此節之出生養生不相叶一昨五日死去之段申来、
一 一日遠慮之儀以手紙被相届一通承知之旨及答候
一 九郎大夫〆申出候者此節番所御用二而足輕七拾人参居候を吉藏申合候而式拾人差返度、水浦江足輕六拾人相残居候得者都合百十人高二付差閤筋無之趣故則申出之通聞届候段相達候

同八日晴天

一 源一郎江兼々申談置候小比賀慎八・三嶋五郎助・石橋助左衛門江被下候儀、源一郎見込左之通以書付申出候

銀五枚

小比賀慎八

鼠嶋一件二付御世話申上候故二候

同七枚

三嶋五郎助

和蘭陀人共申出之趣依而おろしや沙汰速二申上候故二候

御上下一具

石橋助左衛門

今程何廉と専ら致御用達候故二候

一 寛飛脚差立候二付、六郎大夫血忌引入不及遠慮出勤有之候様相達候趣、且右出生養生不相叶死去二付七日一日遠慮之儀申出有之候趣彼是一通申遣候
一 甲斐守様〆先日御書被下候御請、外二御礼家老中迄以書状申上候

一 上々様江寒氣御機嫌伺之呈書并此節所務減可被仰付之処御憐愍之上御用捨被仰付候御礼、以呈書申上候
一 同便二昨日源一郎〆差出候、慎八・五郎助・介左衛門江被下候儀六郎大夫より久大夫迄被申越候

同十日折々雨

一 今日時津迄罷越善大夫・文助・久之進・松本五郎八も

參候、三里二者近覺候

一 去八日立大早飛脚着、佐嘉（總目）示談書之答振此節付札有之分返來ル趣意ハ大村殿御携之次第不相分候故、佐嘉江可及答二者大村殿御携之儀御奉行所之御居不相弁候付、佐嘉聞役致同道御奉行所江罷出御同所之御居り先承見候方ハ如何可有御座哉、於御同意ハ右之通仕度旨之答書ニ相成申來候

一 水浦并御宿町一件先年平賀殿・高尾殿江被仰立候趣と不引合候間右等之處を御奉行所江響かせ方之儀先便御国元より申來候得共、此元評議之趣最前申遣置候処猶御国ニ而評議有之候処右一件ハ被仰立候義先被相見合置、拙者帰着之上重疊申談追而被仰立方も可有之候間被相控候方可然旨申來候

同十一日晴天

同十二日同

一 去四日出船之練立榮寿丸今夕致着船候

同十三日暮比（雨）

「魯西亜船渡來記」

同十四日寒氣強折々霰

一 聞役手元（中）早飛脚差立候、依而手許（者）佐嘉之答書先日御国（中）致添削來候分相達候、委細者追而可申述段一通申越候

一 今夕飯後作右衛門殿中嶋馬場江罷越致調騎候、其節足輕頭六人外二善大夫も致同道候

馬数左之通

萩原月毛

末吉青毛

笠山青毛

右御馬

大崎枿栗毛

春山青毛

津屋川栗毛

同十五日昼比（晴ル）

一 聞役手元江大村聞役北条李之丞より及書通候ハ、上総介殿御事御參勤之儀被相伺候処不及其儀旨ニ付此段為承知申遣候由申來候

同十六日晴天

一 去十二日立寛飛脚着、甲斐守様御參勤之儀最前被相伺置候処先月朔日御付札ニ而最前之末最早御參勤御間も無之儀故、来々寅年常例之通御參勤之御時節御伺被成候様との義ニ付先月廿四日立大早飛脚去八日御国着之由申来候

一 先月廿三日従大御奥以御奉文御鷹之鷹 御満衛様御拝領被遊候段御到来有之候趣申来候

一 例年被下之冬鳥一羽丹半右衛門（佐木）以奉札達来ル

一 殿様両御満衛様 勘解由様（佐木）御意有之候旨申来候

同十七日晴天

同十八日同

同十九日同

一 両御奉行所并作右衛門殿江寒中為見舞善大夫同道ニ而罷越候

一 九郎大夫（佐木）申出候ハ、白石権右衛門乗船小鷹丸梶取一助・手明金六と申者、芦屋浦水夫弥十津屋崎浦同与平

と申者と去十六日・十七日両日ニ致口論水夫共を強致打擲候、常々大酒相好船内不居合ニ有之候処此節之次第金六・一助不埒之趣相聞候、依之水浦明藏ニ右兩人召込置番等付而猶重疊遂詮議双方口書をも出させ、幸此節參居候榮寿丸帰船ニ兩人之者差返候積ニ付小鷹丸梶取者歸船梶取を繰上、右跡歸ニ者夷丸手明（佐木）相勸させ候合ニ御座候、先此段承置候様との趣申出候

同廿日暮比（佐木）雨

一 九郎大夫（佐木）申出候ハ、喜多村吉十郎祖母死去、右者足輕頭国友左門養家叔母之続忌中ニ而引入候段申出候、然処番屋御用ニ而罷越居候面々故右御用明日ニも起候節ハ及差間候ニ付直ニ忌御免之儀九郎大夫江相達候、以後至翌日為御札左門儀手前木屋江罷越候

一 小鷹丸乗組一件口書本人者不致出来候ニ付組合之水夫共見受候処を書取、箱崎浦大庄屋より之申出且浦方付山内佐左衛門（佐木）も（佐木）通、外ニ是迄水夫とも追々逢打擲候度数并梶取手明江取替置候米錢員数之書付（佐木）帳、梶取一助・手明金六（佐木）之口書（佐木）通指出、明後廿二日鎌立帰船ニ弥右之兩人之御国元江指返候積ニ而、其節足輕

の三人程上乘申付候由九郎大夫の申出承置候、猶委細大頭中江同人より申遣候趣とも同時申出候

同廿一日折々雨

一 去十七日立寛飛脚着無別条

（重田長好）

一 甲斐守様御參勤御延引被仰出候二付御奉行所江御使者を以被仰達候、使番喜多村重助去十七日出立之由今日致着候、右便二最前六郎大夫内方平産以後出生死去二而彼是引入御免之儀相達候趣申遣置候末承知之段付札二而申来候

一 惣当御用状二者、三嶋五郎助・石橋助左衛門・小比賀慎八江被下之儀相済来候

一 惣船数書付之内壹艘書落有之処、六郎大夫の久大夫迄被申越置候末是又程能書加之儀申来候

一 六左衛門殿着二付從 殿様上々様御意之趣同人の相達有之候

（重田長好）

一 甲斐守様御參勤御延引被仰出候段家老の爲被仰付申

越候

同廿二日晴天

一 御国元江寛飛脚差立候

一 一名二者国友左門忌中引入罷在候段申出候間、忌御免之儀相達候趣并小高丸喧嘩一件一通申遣候、委曲者九郎大夫の同役中江及書通候段をも申越候

一 惣当二者魯西亜人共梅ヶ崎より新地江立除候節大村殿（重田長好）

の警固之儀二付、佐嘉の及示談候末答書先日源一郎手元江渡置候処、佐嘉聞役の源一郎江致面談度旨申越候故罷越及出会候処、伝之丞申聞候ハ示談之答書ハ源一郎手元二而何卒見合呉候様有之度候、彼方二而も得と相調子候由申候二付源一郎相答候者、最前二過二御答書も相認置候趣申候処、伝之丞又々及噂候ハ彼方の致御示談置候末今更御答不被下候様可申述様者無御座候得共、可相成候ハ、源一郎手元二而暫見合呉候積類二相頼候故、切角及内談候儀を押而及答候も如何二付先當時見合置候趣申越候

一 但去十七日の御使者便二来候御用状類夫々相達候趣付札二而指返候

一 六左衛門殿江戸立之節從 殿様上々様清照院様・勘解由様 御意被成下候御礼今日之日付二而差上候、衣非茂記出立之節殿様両御満衛様・勘解由様より御尋之御

礼をも去十九日之日付ニ而是又差越候

但外ニ從殿樣寒中為御尋鷹一羽被下候、依而御請者丹半右衛門迄申上、御札ハ嶋甚之丞・井手勘七迄申上候、甲斐守樣御參勤御延引之儀被仰出候御祝儀（重田長幹）甲斐守樣并奥樣・勘解由樣江申上候

右之御模様秋月家老中より為被仰付去十七日之便ニ申越、御請も一同申上候

同廿三日夜ニ入雨

一 三嶋五郎助・石橋助左衛門・小比賀慎八江被下、今日源一郎於木屋同人々夫々相達候

同廿四日曇

一 一昨廿二日九郎大夫の申出候ハ、番屋為御用被差越候足輕頭六人々以横折申出候者、御扶持方米者御国元ニ而被相渡候旨承知仕候、然此節火急之出立其上兼々勝手向不如意ニ有之候上町宿ニ而何廉無抛入財多唯今之模様ニ而者滯留之程も不相分候得者、甚以恐入候義ニハ候得共御扶持方米之内拝借之儀被仰付被下候ハ、御蔭を以取続申度段相願候故、吉藏手元江も掛候而遂

詮議候処、差間筋も無之無余儀次第ニ相聞候間申出之通承届御用聞引合候而受取候樣加付札九郎大夫江及差図候

同廿五日折々雨

同廿六日晴天

同廿七日折々雨

一 朝飯後六郎大夫方木屋江參候

一 御国去廿四日立寛飛脚着、去四日守衛之面々出船之儀申遣候趣付札ニ而承知之段申来候

一 惣当御用状ニ最前甲斐守樣御越之節御奉行所江被仰達（重田長幹）置候者、魯西亜船帰帆之比者御越被成間敷段被仰置候

得共此節御參勤御免之儀被仰出候ニ付、帰帆之節ハ又々御越可被成候段御奉行所江被仰入候方ニ而可有御座則御口上案差越候、然共若おろしや人共御奉行所江被招呼以後早速帰帆被仰付候ハ、甲斐守樣御越座之間も有之間鋪候ニ付、其節ハ手前相心得居候而右筆之趣御奉行所江申入ニ而も可有御座候哉彼是遂評議候様申

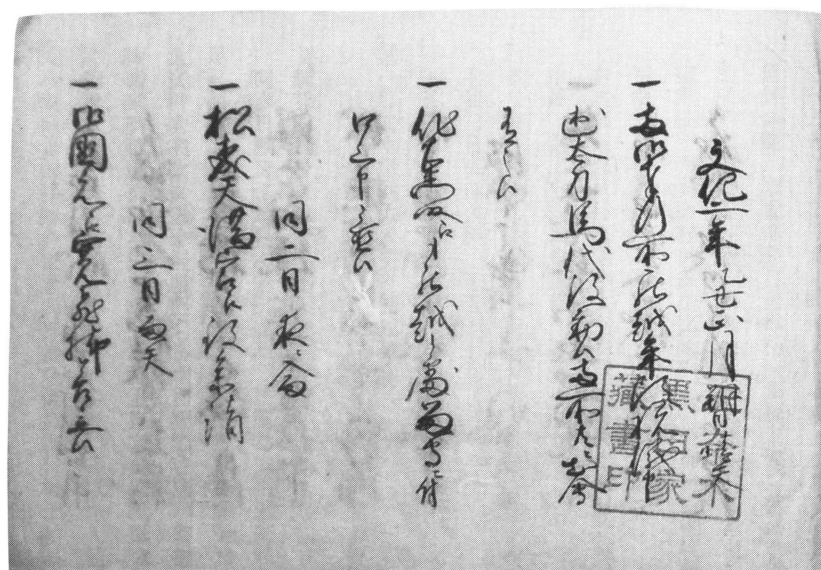
来候

同廿九日雨天

一
兩御奉行所江歲暮為祝儀源一郎同道罷越候、其節六郎
大夫并九郎大夫儀も罷越候（寄来）作右衛門殿江も同時参候

同晦日晴天

一
無別条



「魯西亜船渡来之記下」(三奈木黒田家文書490)

文化二年乙丑正月朔日晴天

一 兩御奉行所罷越年頭祝儀申述太刀馬代致勤候、兩所共

二出会有之候

一 作右衛門殿江も罷越候処留守二付口上申置候

(高木)

同二日夜二入雨

一 松森天満宮江致参詣

同三日雨天

一 御国元江寛飛脚差立候

一 一名御用状二者、御宿町固御用二而罷越居候足輕頭方

一 差間筋申立、御扶持方米長崎二而拝借致度段旧臘相願

一 間通候趣申越候、追書二者右之面々御屋鋪内空御木屋

一 江相住居候様相達候段をも申遣候

一 惣当二者、魯西亜船帰帆之節八甲斐守様当津御越可被

(重田長好)

一 成哉之段御奉行所江御相談之儀、去十二月廿四日之便

一 二申来候趣之返答申遣候

一 御奉行所江魯西亜人共一度被召呼候ハ、帰帆をも可被

仰付候間、其節ハ手前初六郎大夫方江も直ニ引払可申哉、然共模様ニ因而者帆影見隠候迄ハ相滞可申哉、右等之趣申合候而申越候様是又去十二月廿四日之便ニ申来居候付右返答左之通ニ申遣候

おろしや人願筋事々相濟帰帆被仰付候ハ、拙者初出崎拘合之面々引払平常御非番年紅毛船入津帰帆之節通使番ハ帆影為見隠被差越可然候、然共申立候筋御許容無之帰帆被仰付候ハ、何れニも不相借候而者不都合可有之候、就右只今より相決候而者御答難申候間追々模様相分次第可申述旨及返答候

一 昨二日関伝之允ハ源一郎迄及掛合候ハ肥前守様御痛所（御意方迄）以今御全治無之ニ付左衛門佐様為御名代御越可被成候

一 処、当春御參勤之筈ニ付右之趣被相伺置候処御当番中ハ御參勤ニ不及旨御付札ニ而被仰出候、右者而御奉行所江拙者罷出其段相動候、依而及御知らせ候由申来居候ニ付其旨六郎大夫方ハ追書ニ被申越候、尤聞役ハも同様及言上候

一 同四日寒風

一 御国元去朔日立御使者富永作十郎着、右ニ付一名御用

「魯西亜船渡来之記下」

一 状二野村新右衛門方職分被仰付候旨從江戸表去十一月廿四日立之大早便ニ申来候ニ付旧臘十五日御内意治左衛門殿ハ被相伝候、依而来七日被仰付候筈ニ有之段申来候、尤右相濟候上ハ又々可被申越候得共先為承知申来候

一 江戸御用人ハ寒中安否被遊御尋候奉札達来候

一 御満衛様御床揚御祝儀最前申上候未達 御聴候段、市左衛門殿ハ被申越候

一 御剃髪之儀相伺依而呈書之末是又同様申来候

一 惣当二者、水浦江被残置候船々乗組最前と者違御用之趣次第二者被減俵之乗組ニ被仰付候ハ、惣人数之内ハ三拾人余相減候由船手頭ハ申出候、然共於御国元ハ兎角之差因難及候ニ付於此元申合候而否申越候様申来候

一 付札ニ申来候ハ、最前惣御人数御書出之節詰合聞役も御書加ニ相成候方可然と申合候ニ付、若御奉行所ハ御尋等も有之候節ハ御用聞名元之次ニ書加八人扶持被相渡置候ニ付上下八人と書加候心得二候、就右御国元ニ而も 公義江御書出之御書物ニも右之通有之度旨最前付札を以申越置候末此節再付札ニ而右之趣者致承知候、

然処立花善大夫儀ハ現人数十四人召連候趣申出候ニ付其通書載ニ相成居候事ニ候、然者源一郎人数と者不引合候得共家頼々々ハ惣絞リニ而御書出相成候事ニ付差閤ハ有之間鋪と存候旨申来候

（奥田殿前）

旧臘十七日甲斐守様上座・下座御里氣被成候而、三奈木村大庄屋清右衛門宅江御休被成候節星野榮作と申者加藤忠左衛門処江被差越候而手前安否御尋被成同所御休御都合能御太慶思召候、右之趣忠左衛門江相達候様との御事ニ而榮作の相伝候ニ付忠左衛門の先承知仕候、長崎表江申越ニ而可有御座段相答置候旨旧臘同人の申遣候間右之御礼家老中迄今便申上候事

同五日曇無別条

節分ニ付今夕高村慶藏例年之通鬼豆囃子候

同六日曇無別条

御小性富永佐十郎儀今日罷帰候付、同人便ニ来候御用状夫々付札ニ而指返候

一名之分も一通承知之旨加付札差返候

水浦詰船々人数減之儀不可然、其外ハ事々致承知候段

付札ニ而差返候

寒中為御尋奉札来候分是又御請差越候

同七日寒風強無別条

同八日晴天同

同九日寒風同

同十日晴天同

穩密方松本忠次の内々相知せ候者、此節御目付遠山（通書）金四郎殿下向之由申来候、其外御陸士目付式人・隠目

付二人是者前廉ニ入込候趣ニ有之由、未出立日限等も不相分、此節魯西亜人共申立候趣多御聞得有之ニ而可有御座候、併參府之儀ハ御許容有御座間鋪被存候事無手拔様相心得御用取調子可申旨被申付候、右之趣内々先御知らせ仕候由申越候

其後聞伝之允る源一郎江以手紙申越候ハ、今日御奉行所の呼出ニ付罷出候処用人を以被申聞者此節遠山（通書）金四郎殿御目付魯西亜御掛り合被仰付候而下向之由候、

然処未出立日限も不相分御老中方々被仰越候義ニも無
之寔ニ遠山殿々以町便被申越候、当月下旬来月初旬之
江戸御出立ニ而可有之左候得者三月初着崎可有之趣用
人申聞候、右之趣伝之允々一統及通達候様との事ニ有
之段掛合来候

同十一日昼後曇無別条

同十二日朝小雨

一 大早飛脚差立、一名御用状なし、惣当ニハ一昨日佐嘉
聞役まで從御奉行所達之趣申遣候

一 原吉藏手元江金子来候、才料飛脚去八日立ニ而爰元今
日着御用状なし

同十三日晴天

一 萩本伊右衛門相伴ニ而今朝具足鏡餅相披候

一 朝飯後々作右衛門殿馬場江參調騎、右近辺井良林と申
(高木)

所江守安茂四郎別業申受弁当仕廻罷帰候左之面々も罷
越候

六郎大夫

「魯西重船渡来之記下」

九郎大夫

吉藏

立花善大夫

脇山斎次

久保山文助

根本源七

浦野半平

津田甚大夫

一馬数左之通

鹿屋月毛

萩原月毛

笠山青毛

右者御馬外ニ手馬ニ疋

一 今日佐嘉聞役、源一郎御木屋江罷越申聞候者、肥前守

様御事御不快御大切ニ被及候段兩御奉行所江御知らせ
有之候、依而同様ニ相知らせ候由及演説候ニ付其段御
国元江六郎大夫々一名ニ而申越相成候、委細者聞役々
及言上候

同十四日晴天

一 聞役手元ヲ御用有之御国元江寛飛脚差立候、手元ヲ者申越候御用筋無之候

一 肥前守様御大切之御模様ニ付御番方弥入念候様との御事（肥前守様）

事ニ而鍋嶋越後昨日当所致参着候由

一 一昨日（肥前守様）豊後守殿（肥前守様）以捻寒中為見舞且歳暮江罷越候、挨拶両通以捻被申越候間從是も猶又家老西尾儀左衛門江

対捻ニ而及再答候

但達方ハ小性使ニ而儀左衛門木屋江持せ遣候

一 御国去十一日立寛飛脚着、最前足輕頭御扶持方米拝借

之儀承届置候趣申越ニ相成候条、承知之段付札ニ而返

答申来候、一名ニハ新右衛門殿職分被仰付候趣申来候

一 先日佐嘉物頭田中半右衛門以使札肥前守様旧冬以来之御不快御勝不被成候ニ付御典葉様御願被成候旨申来候

二付、同席衆より御使番使者ニ而御容体被相伺候間、

手前儀者滞崎中故書状を以相伺ニ而可有之旨申来候ニ

付、明十五日詰込足輕飛脚ニ而彼方家老中まで御機嫌

相伺候

一 惣当ニ者、最前申遣置候通甲斐守様此節魯西亞船帰帆之節御出御相談之御使者比合且御口上之内存寄有之候

廉々同意之趣申来候、然ニ至唯今御使者被差遣候而者

最早期後ニ相成候事故御奉行所江聞役罷出候而不指立

帰帆之節者甲斐守様御越之御積ニ被成御座候段申入、

猶御奉行所ヲ之御差図ニよつてハ御模様も可有之旨申

来候

一 自然帆影見隠と申節ニも至候ハ、又々御台場飾等有之

節ハ急速御人数被指越候御手当ニ者相成可居申候得共、

為念申述候趣是又最前申遣置候処致承知候、異船御手

当通之処相調子置候間若弥帰帆之節飾方等有之候模様

ニ候ハ早々可申越其上ニ而夫々相達可申旨申来候

同十五日昼後雨

一 九郎大夫噂ニ而水浦江罷越候

一 佐嘉聞役（肥前守様）源一郎迄及掛合候者、肥前守様去十二日御

逝去之旨相達候段申来候ニ付、聞役より大早飛脚差立

及言上候、手元ヲハ御用状無之

同十六日雨天無別条

同十七日少々雪

一 中早飛脚差立候得共從是仕掛ニ而申遣候御用筋無之、

新右衛門殿職分被仰付候段致承知候旨加付札差返候、

惣当ニ者去十二日立飛脚便ニ申来候甲斐守様御出御相

談御使者御国元（奥州府直）可被差越候得共、期後相成候間聞役

可罷出相勤候様申来候末、爰元ニ而申合候ハ近々御目

付下向之儀相記其上肥前守様御逝去折柄ニ付旁御国元

御使者を以御相談被仰越候方弥御手厚可有之と遂評

議候ニ付猶又右之趣申述候旨再付札ニ而差返候、并同

時ニ来居候おろしや船若婦帆之節御台場飾等有之節ハ

急速御人数被差越方ハ致承知候、然共大頭江者は迄之

通水浦江被指置異船御手当通之役々被差越候節ハ大頭

者別段被指遣候様との趣是又再付札ニ而申遣候

一 兩御満衛様（奥州府直）寒中安否御尋之御請今便差立候、殿様

江同様御機嫌相伺候而御肴差上候処逐披露候段市左衛

門（奥州府直）奉札来居候、御札是又申上候

一 肥前守様御逝去ニ付家老中迄御吊詞申上、左衛門佐様

江も御機嫌伺之書状是又家老中江差越候間今日詰込之

足輕を以申遣候

同十八日折々雪

「魯西亜船渡来之記下」

一 此節肥前守様御卒去二付而ハ甲斐守様（奥州府直）使番毛利又助

被差越、兩御奉行所并（奥州府直）作右衛門殿沖御番頭中江 御意

被仰遣候趣ハ、肥前守様御病中（奥州府直）公義江御願置有之

候ハ、若御病氣御快復無之節ハ同氏左衛門佐江諸事相

勤候様被仰付可被下旨被相願置候段致承知候、御奉行

所江も同様御承知可被成と存候然共未被仰付趣ハ不致

承知候、拙者儀此節在所江罷在候ニ付相応之御用有之

候ハ、被仰聞候様存候由右申述候後別段被仰達置候者

右之趣江府官兵衛江者申遣事二候、且又此節官兵衛家

老黒田源左衛門儀魯西亜船就渡来其地相詰罷在候故同

人江被仰聞候様存候由之御口上二候

一 作右衛門殿并御番所江者右之通御奉行所江被仰達候ニ

付、御口上仰遣候由

一 右之趣ニ付猶又無御手拔様手前・六郎大夫江 御意有

之候、右御請御札御使者帰便ニ以書状申上候

一 御用状右之御使者被差越候次第委細申来候、并肥前守

様右之御模様ニ付御番渡例（奥州府直）も早き方共二者有之間鋪

哉、左候得者此折柄ニ付御番手被指越方其外御番受取

として被差越候、同席心得方等之儀追々取調子申遣候

様との趣二候

同十九日寒氣強

又助儀今日御番所渡海、開役同道二而相勤詰、船四挺小早二而罷越候趣二候得共、右之通二而者甚以不都合之儀二付、大頭九郎大夫通船三十石小早二而罷越候様取計せ候

同廿日晴天風立

又助今日罷帰候二付持參之御用状夫々付札二而指返候、重田守様甲斐守様御口上之内御不都合之所有之候故加添削相勤させ候段委細申遣、一名之分ハ得と取調子候上追而可及返答旨をも申越候

重田守様甲斐守様江之御請是又同便差越候

六郎大夫方一名二者右之御請差越候間秋月江相達之儀頼越二相成候、外二壹通ハ荷船近々其元江指返候故用向相濟候ハ、早々出船候様被取計度旨委細者久大夫方迄書通有之候

去十五日立寛飛脚到着、一名御用状二者足輕頭国友左門儀父致病死候二付於爰元其段申出候ハ、不及遠慮出勤候様可相達旨申来候

惣当御用状付札二而申来候ハ、此節金四郎殿下向之趣

龜山殿下

從江戸申来候、依之從重田守様殿様・甲斐守様御書を以兩御奉行所江御勤被成事二候、其段者聞役手元江委細申遣置候由、偕右下向二付候而者甲斐守様江も御越被成被得御對話度旨以御使者被仰遣候方可然と申合候、然共最前申来候おろしや船帰帆之節ハ折柄御在邑之御事故御越座被得御對話度旨之御使者聞役相勤候、以後金四郎殿此節下向之上御對話御越座之御相談御使者是又聞役相勤候様申来候、然処去十七日之中早便二從是申遣置候おろしや船帰帆之節御越座御相談之御使者ハ御国元より被指越候方御都合可宜段申遣置たる事二付、今便聞役御使者二而者不都合之次第故俄二大早飛脚差立申越候、大意左之通

最前其御元々被仰越候おろしや船帰帆之節甲斐守様御越座御相談之儀聞役御使者二而被仰達候、已後此節金四郎殿下向二付而之御越座御相談之儀被仰達候様有之度同意候ハ、右之通取計候様被仰下致承知候、然共去十七日二申演候通御使者其地々被指越候方御都合可然、於爰元ハ申合候二付御同意候ハ、其御元々御使者被指越候様申述置候事故、右御使者ハ不相勤内之儀二付此節遠山殿下向之儀昨日表立御奉行所

より達有之候ニ付右御承知被成候日繰ニ而遠山殿下

向ニ依而之御越座御相談を先ニ被仰述べ候共、御不都

合者有之間鋪御書勤と御目合之遲速者有之候へ共御

書勤ハ遠山殿下向之儀江府より申来候処を以一通之御

文断ニ而此節下向付而之御越座御相談之御使者ハ昨

日之達ニ依而之御事ニ候得者御不都合者無之事と存

候、就右若先便從是申述置候趣御同意ニ而御使者被

指立置候ハ、当地着之上帰帆之節之御相談者被指控

置、遠山殿下向ニ付而者御越座御相談之御使者相勤

させ可申候、尤昨日達之末ニ付御承知之日繰を取候

而勤させ候事候、何れニも御越座御相談之御使者ハ

御国より被指越候方可然存候、左候ハ、魯西亜船帰帆

之節御越座御相談ハ此節右御使者相勤候趣ニ依而追

而被仰達候方可然と申合、右ニ付此節大早飛脚を以

申演候猶否早々被仰下候様との趣申遣候

一 昨十九日佐嘉開役御奉行所より呼出ニ而罷出候処、此節

魯西亜御用ニ而遠山金四郎殿御目付下向之趣從江府申来

候、就右為心得被相達御一統江者同人より及通達候様と

の趣ニ付其段聞伝之允より上原源一郎・立花善大夫迄申

越候由申出候、最前達之分ハ先内々之達ニ而此節達ハ

表立候而之事と相聞候

同廿一日晴天

一 肥前守様御卒去ニ付去十五日より当時致物静候様源一

郎より一統達させ置候得共、最早数日ニ相成候ニ付不

及其儀旨源一郎江相達候

一 今日六郎大夫方船一同ニ御国江用事有之指返候

一 国友左門儀父致死去忌中引候段九郎大夫より申出候

同廿二日雨天

一 左門儀忌中不及遠慮候段九郎大夫江以剪紙相達候

同廿三日晴天

一 昼後割石より水浦迄罷越候

同廿四日晴天

一 去廿日御国立寛飛脚到着、一名御用状なし、惣当付札

ニ魯西亜船帰帆之節甲斐守様御出御相談御使者柄之儀

最前此元より付札ニ而申越置候未再付札ニ而矢張開役御

使者ニ而可然之旨ニ候得共、趣意入割候ニ付爰ニ大意

「魯西亜船渡来之記下」

を記猶委細ハ館記有

一 六郎大夫一名二者、手前儀遠山殿江勤振之儀是又最前申越置候末詮議有之候処、御国ニ而も委鋪ハ不相分候、享保年手前家より出崎之比御目付被相詰居候趣ニ付、其節之記録段々詮議有之候得共勤振不相分候、何れニも太刀・小馬代勤ニ而可有之と於御国者申合せ候趣申来候

一 今一通同人江之御用状ニ、遠山殿着崎之上ハ手前初六郎大夫江も出方之上此節魯西亜船渡来ニ付致出崎罷在候ニ付、相応之御用も候ハ、被仰聞候様申達相勤候方と申合候、於御同意者其通ニ而御勤被成候様との趣申来候

同廿五日晴無別条

同廿六日晴

一 去廿四日立大早飛脚到着、一名之御用状なし、惣当二者追々取合置候、甲斐守様御越座一件再々付札ニ而申来候、甚入組候ニ付荒々記置候、委鋪者有館記

追々被仰越候趣猶又申合候処、最前甲斐守様御越御

対話之節おろしや船帰帆之節ハ御越被成間鋪旨被仰達置候末ニ付、御約不被成遠山殿下向之上御出之儀御相談ハ御不都合可有之候条、矢張帰帆之節御越座之御相談之方を先ニ御勤相成、以後御目付下向之上御越座之御相談を被仰掛候方たるべく、尤御国より御使者ハ不被差越聞役ニ而可然旨申来候

一 就右猶又重畳遂評儀候処甚以御不都合可有之と申合候間、同日又々御国江大早飛脚差立申遣候、是又入組候ニ付大意爰ニ記置候委鋪儀者館記有

右被仰越候趣を以相勤させ候時者從御奉行之御答ニ御目付下向も指向居候間、御着崎之上魯西亜人共江被仰付振も可有之、右ニ付御答唯今より御挨拶ハ難被申由之御返答共有之候而者其後遠山殿下向ニ付、御越座之御相談を夫より被思召出候様二者相聞間鋪哉、左候而者弥御不都合之事ニ付帰帆之節之御越座御相談を後ニ被仰達候方たるべく申合候、右追々其御元にも被仰越候を兎角申演ニ而者無之候得共、此元ニ而者前文之通御都合類ニ可宜と存候ニ付及御掛合候と一応被遂御評議ニ而被仰越候ハ、其上者両様間相勤させ可申候、且おろしや船帰帆之節ハ御越座之

御相談を唯今被仰掛候ハ、於御奉行所ハ最前御參勤ニ不及旨被仰出、御在邑被成候旨被仰達候節ニても右之御勤も可有之処、至唯今御勤御相談有之候ハ、最前全御勤拔ニ而可有之と可被相察儀ハ必定ニ候、次二者右等之御勤有之儀者佐嘉江も直ニ及掛合候事故於彼方ハ弥御勤拔と可致誹謗も難計、彼是ニよつて右之通申合亦々申越候

同廿七日雨天無別条

同廿八日同

一加藤团右衛門御国元去廿五日出立ニ而今夕長崎着

右者暫滯崎ニ付容子相伺候ため罷越候

同廿九日晴天

一 今日御国江中早飛脚差立

一 此方様御番ニ相成候而之御仕構ニ件取調子之上申遣候、原吉藏兼而存寄申出置候次第是又申遣水浦詰之面々交代被仰付度旨をも同時申遣候事候、入組候儀ニ付委曲館記有爰ニ省

一 溜池御満衛様江從 公方様御台様歳暮為御祝儀御拝領物被遊候趣最前申来居候間、殿様両御満衛様江御祝儀呈書指上候

一 去廿三日如例年正伝庵江 御代香被差立候趣承知之上今便月番迄以呈書御札申上候

一 甲斐守様去十四日福岡表江御出之節正伝庵江 御代香(重田長好)被指立候旨申越候間、御国ニ而相仕立爰許差越候処ニ相心得取計候様留守江御札状之儀申遣候

二月朔日晴天無別条

同二日同

同三日同

同四日同

一 今日御国元先月廿八日立寛飛脚到着、一名御用状ニ同月廿日長崎差越候御用状ニ一通御承知之旨付札ニ而返来候、右者最前御国(高島市役)肥前守様御卒去二付自然御当番早く相成候節之調子之儀申来居候間追而取調子可申

「魯西亜船渡来之記下」

述旨申遣置候未承知之付札二候

一 年頭之御書被下候由二而御用人（重田長村）被指越候、惣当二ハ

最前毛利又助為御使者罷越候節、甲斐守様御口上之内

御不都合之處有之候ニ付加添削候段、同人帰便ニ申越

置候処承知之旨今便付札ニ而申來候

一 去二日御国立之飛脚到着、一名之御用状なし、惣当二

是又甲斐守様御越座之儀ニ付先月廿六日以大早飛脚申

遣置候一件致承知候、御勤之儀御都合能相濟候様聞役

江可申談之趣意申來候

一 荻野波門祖母致死去、手前忌中ニ候得共在崎中之儀故

不及遠慮出勤候様、月番新右衛門殿より申來候

右之趣六郎大夫江者及掛合候

一 甲斐守様江年頭御祝儀申上置候処右為御挨拶御書被下

候

同五日曇

一 遠山殿着崎之上甲斐守様御出被得御對話度段、両御奉

行所江聞役御使者ニ而御勤有之候処、両所共ニ同様之

答振候、少々之違ハ有之候得共趣意同様ニ候大意左之

通

御口上之趣致承知候、遠山殿着崎ニ付而之御越二者

不被及候、御機嫌御伺等ニ而御出ハ格別之儀ニ候得

共其儀ハ於旅中御整被成候御事ニ候、左候得者御越

二者不及候、御下知之次第ハ金四郎殿（龜山源次）可被申聞候、

其上ニ而致帰帆候ハ、其節ハ御越も可被成との趣ニ

而余者相応之挨拶ニ候、其後用人申候者帰帆被仰渡

候共今程梅ヶ崎上陸もいたし居候事故彼是と仕廻も

相応可有之ニ付、其日間十四五日も可有御座候間必

御越之間者有之候半と存候旨用人申聞候趣源一郎（重田長村）

申出候

同六日夜二入雨

一 中早飛脚差立右之趣御国江申遣候、并御答振ニよつて

帰帆之節御越座御相談之儀ハ御国元ニ而被仰合候次第

も可有御座、否追而被仰下候上ニ而御勤之儀聞役江申

談ニ而可有之段をも申遣候、扱又遠山殿（重田長村）下着之上御非

番方御人数船等之高帳面ニ而被指出候様被申聞候ハ、

兼而調子之所を以可被仰出候、若御当番ニ相成候而之

御人数船高等者何程被差出候哉など御尋有之候ハ、御

非番方調子之所ニ基御指出可被成候間、御同人着崎前

御取調子有之候而被仰越候様存候趣をも申遣候

一 此節着御免之御請且又御札をも新右衛門迄差越候

一 溜池御満衛様江年頭為御祝儀御看指上候処御満悦被成

候趣二日之便二頭分〆申来候間今便御札呈書差越候

一 御手船宮丸先月廿六日波戸場出船二而今日着左之通積

越来候

一米八百五拾俵

一 銀一箱

一 錢六貫目

外二御家中荷物をも少々積来ル

梶取孫六

手明宇七

一 同七日昼後折々雪

一 聞役呼出二付源一郎御奉行所江罷出候処、唐船浦触例

之通書付を以被相違候

同八日晴天

一 御国元去五日立之大早飛脚病氣二而延引今夕致着候、

先月廿九日從是申越置候御当番二相成候節之調子筋事々

「魯西亜船渡来之記下」

承知之旨付札二而返来候、吉藏〆存寄申出候儀二付申

越候一件是又承知御国二而も御用聞江夫々御聞欠無之

相勤候様可申談由、普請奉行之所も同様之趣候

一 大頭交代之儀者^{遠山殿}下向も差向候上唯今〆交代之儀

取組候ハ、凡同氏御着津之比二も可相成候間、数日滯

留所者追而御沙汰之通ハ可有御座候、夫共是非交代差

越候様との儀二候ハ、差立二而可有御座間、今一応勘

弁之上申越候様存候旨申来候、追書二ハ此節調子之人

数船之儀者切詰候事二付足輕頭其外関船二艘も被相増

被差越候得者、此元二而ハ猶更都合能段申遣置候処致

承知候取調子候様可致旨之付札二候

同九日雨天

一 月次御使者帆足万右衛門着、御用状なし、六郎大夫手

元江一通り之付札来ル

同十日陰無別条

同十一日晴天無別条

同十二日晴

帆足万右衛門今日出立候二付、去五日立飛脚便二付札二而申來居候御当番二相成候節之都合取調子、且大頭初交代之儀者最前御台場守衛（原書）引続（原書）き候而之事二而余数月二及候故申述たる事二付、強而交代不被仰付候共差間候筋無之候条、於御国元御評議之通可然存候、遠山殿着津之上帰帆日間取候節者猶其御元二而御評議も可有之と存候趣をも申遣候、外二者一通之義而已二而入組候御用無之候

今日御奉行所（原書）佐嘉間役江達有之候ハ、遠山殿弥先月十九日江戸表出立之旨申來候、おろしや御用之外諸立合御用等前々追々御目付下向之節之通相心得候様申來候段被相達候二付、則右之趣及通達候旨佐嘉間役（原書）源一郎江申來候

御国元去八日立寛飛脚到着手元江之御用狀無之

同十三日晴天

昼後大德寺天満宮其外体性寺辺江罷越候

同十四日晴天無別条

同十五日晴天

去十二日立寛飛脚着、一名二ハ御当番調子之内二関船一二艘増之儀最前從是申遣置候末御国元二而評議有之、船手頭江も掛詮議有之候処、申遣候通之船繰二相成候而も未弍拾二挺立壹艘・五拾石小早壹艘乗戻之分有之候二付、右通被差留置候而者如何可有御座哉之旨申出候二付、於長崎存寄も無之候ハ、其通可取計候、若從是否不申越候内御当番二相成船々致出船候ハ、其通之心得二而指廻候様船手頭江相達可申由申來候、幸明日飛脚是（原書）も差立候間存寄無之段則付札二而指返候

最前從殿様御書被下候二付御請差越置候処、則相達御便之節差越可申旨御用人（重田長軒）以付札申來候

甲斐守様御越座之儀最前申遣候処、於御国元二評議有之帰帆之節御越被成候御積二付先日以間役御相談被成候節御答之御挨拶旁右之通御国元（重田長軒）御使者被指立被仰遣候趣二而御口上書案も取立來候、尤両御奉行所共二おろしや人共江之被仰付方之模様も承候而罷帰候様との趣をも右御使者御口上申達候以後二及演說候様相含差越候筈二候、御使者出立比合之儀者遠山殿御領内通行前廉二差立候積之由申來候

一 久大夫（重田長祐）六郎大夫迄一名二而申来候者、甲斐守様此節

御越二付又々花房久七御付添被仰付候、左候得者御供
二而一旦帰国いたし無間も源一郎為交代被差越候儀二
付、甲斐守様御帰路御付添ハ善大夫相勤、久七者源一
郎と致交代源一郎ハ手前付添二而罷帰候而者如何可有
之候哉手前存念等被承合候而否申越され候様二申来候
善大夫妻致出產未血忌残居候間引入候旨相届候、然共
御用差間候間不及遠慮出勤候様以剪紙相達候以後為御
札手前木屋江罷越候

同十六日晴天

一 中早飛脚差立候間、久七儀源一郎と交代之儀并善大夫
甲斐守様御付添二而罷帰候儀爰元存寄無之候、然共久
七追而交代相済亦々代之人柄被差越方之儀者拙者帰国
之上同席中可申合旨、六郎大夫（重田長祐）久大夫江今便申越二
相成候様相達候

一 一名者、善大夫儀血忌引入候段相届候得共御用差間候
付不及遠慮出勤候様相達候趣申遣候

一 御当番調子之内佐嘉及引合候廉々、去十二日彼方より
付札二而返答来候、右二付其段委細申遣候、右之次第

「魯西亜船渡来之記下」

荒々左二記、館記二有之故相省

魯西亜人共立退候船八十式挺立用意二相成居候得と
も夫二而難凌節ハ固船之内（重田長祐）致差繰乗せ組候由申来
候、然共 此方様二而者矢張五拾挺立被指越候様と
の趣申遣候、誠二僥々廉而已記置

同十八日陰

一 去十二日之飛脚便二申来居候おろしや船帰帆之節
甲斐守様御越座御相談之御使者、去十四日出立之由二
而喜多村重助着惣当御用状二右重助被指越候二付、御
奉行所相勤候趣ハ早速以飛脚御国江及言上候様被相含
置候、聞役江も其段申来候由、重助儀者御使者相勤候
已後金四郎（重田長祐）殿着津之上魯西亜人江被仰付之趣承候而直
二秋月江罷越、其段可申上候、御国江者重助儀長崎不
致出立前二大早飛脚を以可申越旨相含置候段をも申来
候

右御用状之内二、遠山殿（重田長祐）去九日室乗船之旨從小倉国
繼所申来候趣相見江候、甲斐守様此節御越も最前之
通御武器ハ御持二相成候様との趣、御同所江申来居
候旨とも申来候

「魯西重船渡來之記下」

一 同十九日晴

（廣島市立）

（廣島市立）

一 佐嘉間役^{（廣島市立）}及掛合候者、最前左衛門佐樣御事肥前守樣御同様諸事御勤被成度旨御願書被指上置候処、則御願之通被仰付候二付、其段而御奉行所江以使札被仰達候旨源一郎迄申越候、就右鍋嶋越後儀近々当所引弘候趣をも申越候

一 重助儀今日而御奉行所相勤候処、被入御念候段一通挨拶二而御逢ハ無之候

一 右之趣大早飛脚を以重助・源一郎^{（重田守）}申越候二付、御使者便二来居候御用状二御書面之通可致承知候、甲斐守樣御越座御比合之儀者十助・源一郎^{（重田守）}直二申上候由二付拙者^{（重田守）}ハ別段申上間鋪哉二候得共、今程在崎中故拙者^{（重田守）}も同様之趣可申上儀二可有御座哉と遂評議、則其通取計候心得二御座候、為御承知此段申遣候旨付札二而差返候

一 同廿日晴天

一 水浦江見分筋有之、六郎大夫同道二而罷越候

同廿一日昼後雨

一 九郎大夫・吉藏一同罷越候而申出候ハ、浦方附山内佐

左衛門此度致交代罷歸候旨二御座候、然処是迄同人追々致掛置候儀も有之候間今十日程も相滞候樣被仰付度旨申出候、遂詮議候処根元同人受持前之儀二も無之全寸志致掛置たる末二付、十日之残と申候而者数日之事二相成候条先七日程と相極、夫二而難相濟節者一兩日之又々日延十日二相成候而も可然段直二及差戻候

一 佐嘉間役^{（廣島市立）}源一郎江申聞候ハ、御番代之儀至而速二可有之旨從江戸表内書二申越候、左衛門佐樣江も三月下

（廣島市立）

旬二ハ御參府、御遺領被相濟候趣之樣二相聞江候、自然此方樣江者委鋪相分居可申哉彼是及問合候由相咄候段源一郎申出候、就右此折柄之儀二付御国江者為心得早々以飛脚申越候樣相達則申遣候

一 右便二手元^{（重田守）}も同様之趣申遣、御番代速二有之魯西重船帰帆之節此方樣御当番二相成居候ハ、甲斐守樣御越座之節ハ御座船并御通船被指越二而可有之候得共、為念此段申述置候旨をも申遣候、扱又左衛門佐樣御越と甲斐守樣御越座と御一同二共ハ相成間鋪哉、是又為心得申遣置候段も申遣候

同廿二日雨天無別条

同廿三日晴天同

一 去廿日立中早飛脚着、一名二当年御番所之儀 殿様御

幼年二付甲斐守様御代番被蒙仰候御書附を以被仰出、

甲斐守様江御奉書を以被仰出候旨御到来有之候、

左衛門佐様江者御番御渡已後御參府被成候様是又於長

崎御奉行所^(御所)に佐嘉御方江御奉書被相渡候旨をも青山様

より被仰聞候由二付、甲斐守様御奉書御拜見之上其段

福岡江被仰越候得者、早速御番手乗船被仰付候筈二候、

加番之面々ハ来廿三日乗船被仰付、本番之面々ハ同廿

五日乗船之筈二候、御番受取ハ隼人殿船路被相越候、

左候得ハ例之通神嶋着船之上直ニ御番受取之儀佐嘉御

方江申入ニ而者自然不都合之儀も可有之ニ付、神嶋着

船之上隼人殿^ハ拙者手元江書通可有之候ニ付、惣都合

取調子置候様との趣申来、其外水浦江乗込之節船飾之

儀等心得方申来候、右書面之内ニ例御番頭江被相渡候

御下知状覺書類ハ此節手前持込居候間、御番頭中着船

之上手前^ハ相渡候様可取計候、其段番頭中江も相達置

候旨相見江候、右御下知状去年アメリカ船・弁柄船渡

来已後番船付方之儀ニ付追々御奉行所江被仰達御答振

ニ寄相改候廉々も有之候処、未其儀なく内ニ此節之一

件差起持込候ニ付是迄之通ニ而被相渡置、又々異国船

渡来之節相違之取計も可有之候間、先此節ハ追々御奉

行所江被指出御答有之候趣之書付写被差越候間、御下

知状相渡候節一同二番頭中江相渡置候様との趣ニ而則

写来候其外御番手名付も来候

但例之御番手之外船手頭宮本帶刀・足輕頭式人・小

船頭三人相増候而差越候由 甲斐守様御奉書去十八

日着、御拜見被成候旨同方家老中^ハ申越候

一 六郎大夫手元江御番被蒙仰候恐悅申上呈書案来候

一 去廿一日立御使者馬杉喜右衛門着、一名御用状なし、

惣当ニ此節御番被蒙仰候趣申来ル、去四日青山下野守

様^(御所)御書付を以被仰渡候趣ニ候

右飛脚便之御用且御使者便之分共ニ委細之儀者館記

二有之故相省

一 佐嘉江者馬廻頭大塚孫大夫被差越候段をも申来ル

同廿四日雨雷鳴無別条

「魯西亜船渡来之記下」

同廿五日晴天

一 今日從御奉行所聞役呼出二而源一郎罷出候処以用人被相達候者、当年御番所之儀此方様江被仰出、佐嘉江者御番御渡被成候様との御奉書御奉行所江相達候二付、可被相渡先例ハ聞役江被相渡候得共、此節ハ手前在崎中之事ニ而重き御品ニ有之候故明日手前江可被相渡、四半時罷出候様被相達候旨源一郎ハ申出候、就右御奉書持参之役者幸為御使者参居候使番介馬杉喜右衛門江被仰付、副使ハ番所御用ニ被差越置候足輕頭江田源大夫江被仰付候儀取計候

但喜右衛門江者出方之儀以剪紙申入、已後出方之上右之趣申渡候、源大夫江ハ大頭江以書付相達候

一 右之趣委細明日御国江申越積ニ候得共、先一通為承知今日大早飛脚差立申遣候

一 去廿三日大早飛脚着、おろしや人立除之節乗船五拾挺立・五拾石小早從是申遣置候通可差廻由、且又善大夫血忌ニ而引入候得共不及遠慮出勤候様相達候段最前申遣置候未致承知候旨等一通付札ニ而申来候

一 惣当二者、重田長祐甲斐守様御奉書御拝見相濟尤廿三日御覽之御形チニ相成候由、御同所より御奉行所江御勤之御飛

札も同日之御拝見と有之候由をも申来候、右之外委細ハ館記ニ有之故相省

一 重田長祐甲斐守様此節御代番被蒙仰候二付、以御書当表之儀重畳入念候様被仰下候近便御請差越候

一 溜池御満衛様先月十五日以御奉文当年御登城可被仰出候処、御老年二付御用捨被仰出、御献上物ハ例之通可被指上旨ニ而則同廿一日被相濟、其後御拝領物被遊候由二付 殿様両御満衛様江御祝儀以呈書申上候

一 今年長崎御番所之儀 殿様為御名代重田長祐甲斐守様御勤被成候様以御書付御達有之、重田長祐甲斐守様江も右御同様之趣以御奉書被仰出候二付、殿様両御満衛様 清照院様江

恐悦申上候

一 右被仰出二付、御番方之儀重畳入念候様 御意有之候二付右御請申上候

一 長崎御番御名代被仰出候御祝儀、重田長祐甲斐守様并與様勘解由様江も申上候

右夫々此節之便ニ呈書差越候

同廿六日晴天

一 源一郎同道、四半時御奉行所江出方之上用人江左之通

申述候

(御局方直)

此節松平左衛門佐樣江之御奉書御渡之儀昨日上原源

一郎江御達之趣承知仕候ニ付罷出候段申述相控居候

處、豊後守殿・因幡守殿列座ニ而対面、豊後守殿被

申聞候ハ、今年長崎御番所之儀被仰出候ニ付左衛門

佐樣江之御奉書被相渡候趣被申聞候節用人横山文平

小広蓋ニ御奉書載候而持出、豊後守殿被受取上包を

解直ニ被相渡候ニ付請取之元之席ニ而御奉書表裏等

得と相改懷中いたし黒田甲斐守江早速相達、同人(長持)ガ

以使者左衛門佐樣江御相達可申由相答、退座例之控

所江持下、源一郎持參之箱ニ入手前封を付、其上淺

黄服紗ニ包、源一郎着座之脇江置、又々可致対面由

ニ付再罷出候處、時候之挨拶等有之候故相応相答、

右相濟候上退去被相渡候、御奉書者源一郎江持せ候

而門外ニ而家来江相渡夫々駕籠ニ入組持帰候

右之御奉書此方樣御名当ニ候ハ、是非内をも可相改

候得其他之御名当ニ付上包計相改受取候

右箱者煮黒メ鎖付緒紫革此節仕立取計候

御奉書持帰木屋ニ而致内見候處、此方樣江御番所御渡

被成候様との御書面ニ候、依之御国元秋月江大早飛脚

一

「魯西重船渡来之記」下

差立、写をも指越右御奉書ハ箱ニ入油紙包ニ而喜右衛

門江相渡、道中重畳入念指急罷越候様相達候、源大夫

儀も一同二呼出喜右衛門申合候而入念候様是又相達差

立候

但指立御用状ハ六郎大夫ガ喜右衛門江被相渡候

秋月江之御用状ハ左衛門佐樣江、御使者之儀者福岡表

ガ委細可申上段一名ニ而申越候

福岡江者昨日着之飛脚便ニ来候、再付札之趣致承知候

旨一通り再々付札ニ而指返候

宮本帯刀儀去廿三日乗船今日八半時着指立御用状持參、

無別条

一 水浦御藥相改申出候様先日九郎大夫江申聞置候處左之

通申出候

惣藥高

九拾六箱

一 内拾七箱ハ不致御用達候ニ付、此度宮丸帰船

之節積込指返

残而

七拾九箱御用達ニ相成候、右ニ而當時差聞之

儀ハ無之御備相立候趣ニ候

「魯西亞船渡来之記下」

同廿七日 至而風雨雖當

一 遠山金四郎殿去廿三日小倉着、翌廿四日六半時同所出立之趣彼方聞役徳原弥平より御奉行所江も申達候旨、類役中江以廻紙申越候段源一郎（兼書）申出候

一 御番交代差向候ニ付魯西亞人御奉行所江呼出之比ニよつてハ甚以可及混雜、譬大波戸・勝山町式ケ所御當番持之場所唯今之内ニ候得者、佐嘉御方（兼書）ハ仕調相成居候処を此方様江御番御受取ニ相成候上者早速彼方（兼書）之分ハ引方ニ相成、此方様（兼書）之分を取建候杯之儀差向候而者手間取、三四日も無之候而者致出来間鋪、旁御奉行所之模様家司西尾儀左衛門江源一郎（兼書）卒度及引合候處、儀左衛門相答候ハ定而可及混雜候、同人全相考候者魯西亞人御呼出無之内御番代相成候ハ、御内分之處ハ右番所大波戸・勝山町式ケ所ハ佐嘉御方（兼書）兼而儲ニ相成居候事故、彼方役人罷出候而当日之所者御仕廻被成候方共ニハ有之間鋪哉之旨相答候ニ付、源一郎（兼書）及返答候者、右之都合者兎角勘弁難致事ニ付出崎之役々江申聞候上ニ而可及御答旨ニ而引取候段同人（兼書）申出候

同廿八日晴天

一

御奉行所用人（兼書）及内談度旨申来候ニ付源一郎（兼書）罷出候處、儀左衛門面会及噂候ハ、昨日御問合之趣豊後守江申達候處御同人江も右指問之所ハ御尤之御事ニ被存候、就右おろしや人共呼出相済候迄者佐嘉御方被仰合交代之儀見合候ハ、其内ニ呼出も相済可申候、右等之趣及御内談候様被申付候旨申聞候ニ付源一郎（兼書）出役之者共江相達追而御答可申旨ニ而致退出候段申出候、依之重疊遂評議候者右之指問一事ニ而御番代延引之儀者不容易事ニ付、様々と評議之内佐嘉聞役関伝之允、源一郎御木屋江罷越候ニ付、彼方之模様卒度相尋見候處同所ニ而も甚難渋之儀ニ付爰元切ニ評議も難相成事ニ而即席ニ儀左衛門江相答置候ハ早速佐嘉江申越同所之模様得と受差図可申当リニ相答置候、就右早速佐嘉表江申遣置候間彼方（兼書）御国元江御相談等申越ニ而可有御座段申聞候ニ付、源一郎相答候ハ右之通相成候ハ、急ニ御奉行所江御答も相成間鋪、其内ニ魯西亞人共御呼出も相済候而御双方御国方（兼書）之御返答不相達候時ハ御番代之儀も就右先御返答相済候迄ハ御見合せなど、申候様ニハ相成間鋪哉、左候得者甚以御不都合可有之旨申聞候處、伝之允申候ハ右之處ハ被仰聞候通不都合ニ可有之

一

候得共何分致方も無之旨相答罷帰候由源一郎ハ申出候、依之段々遂評議候処御番代延引之儀者不容易御相談と有之候而ハ難承知仕、表立御差図と御座候ハ、其通二も承知可仕候、就右御非番中なからも大波戸・勝山町二ヶ所番所佐嘉ハ仕構二相成居候、脇二此方ハも番所仕調置候得ハ、其節二至非番二相成居候御方之分引候時ハ魯西亜人御呼出前日二御番代相成候共差間候儀者無之候二付、右之趣を以御奉行所申達候積二相決候而佐嘉江者一通致申置二引合候方二而可有之と致評議源一郎江相含遣候処、彼方間役承甚以御尤之御答共御同意存候、此方ハも同様二御答仕候方二而可有之、同々一同程二御奉行所江罷出申達度義二候得共、自分切二ハ何分難取計候二付、番頭共江一通申聞度御奉行所勤明日迄見合呉候ハ、明朝二者必可及通達類二申聞候間、彼是之内夜二も入候条源一郎ハ相答候ハ、其儀二候ハ、今日相勤候処ハ見合可申候二付明朝及書通呉候様申聞罷帰候旨同人ハ申出候、就右佐嘉御方ハ之御相談御国元江申来候迄同席中承知無之候而者不都合可有之と存候而、廿七日ハ之模様委細二大早以飛脚申越候甲斐守様御出立御書被下候、御請今日之便二差越候

一 浦方付山内佐左衛門取調子居候御用追々相片付、来晦日來月朔日間帰国致させ候段九郎大夫ハ申出候

一 右飛脚差立候比二相至佐嘉間役罷越申聞候ハ、過刻御噂之趣未番頭共江も不申聞候得共、能々相考候処大波戸・勝山町江御両家ハ同様之番所二ヶ所充被建置候も事々鋪可有之候条、彼方ハ仕調置候番所江此方様御当番二被相成候節ハ、御役々右之番所江御出役被成候而者如何可有御座哉、御差間之筋も候ハ、此方様ハ右之場所江御仕調被成置、未御番代不相濟内二御呼出二相成候ハ、右之御番所江彼方之者彼方ハ罷出候而ハ何分二可有御座候哉、両様共二於彼方ハ差間候筋無之候、此段及御引合候旨申来候趣源一郎ハ申出候、就右打返申合候処甚熟たる談合二付至極同意之事二候、依之源一郎を以伝之允江相答させ候ハ右之御仕組至而御同意二御座候、然とも此方ハ両所共二番所仕調候者何とか失礼二も相当候間、二ヶ所之内一ヶ所充御双方より御仕構二相成候ハ、其節之御番代之振合二依て一ヶ所御借用二相成事二候、然共來月五日・六日比二も御呼出二相成候ハ、其頃者多者此方之番二も可相成候間、二ヶ所共二此方ハ仕調置二而可有之候哉と申合候処、

伝之允申候者段々御手厚儀ニ御座候、左候ハ、両所共
二此方様御仕調被置候ハ、其節御番代之模様ニ依
御借用可仕候右之廉々未番頭共江も不申聞置候間、早
速申越明朝可及書通旨申聞引取候

同廿九日昼後雨

一 佐嘉間役源一郎江及通達候者、昨夜御示談之廉々番
頭中江も及掛合候処、存寄も無之御同意ニ御座候、就
右御奉行所江も此方様同様之趣相答候旨申越候ニ付、
以後御奉行所江源一郎罷出、儀左衛門江及内談前条之
通両家申合候而差間筋無之趣申達候処、儀左衛門相答
候ハ、根元御奉行所者魯西亜人共呼出打混候而御番代
有之候共、聊指間候筋無之唯々御両家之御混雜と相考
御内談ニ及たる儀ニ付、御両家さへも御差間無御座候
者其通可然旨申聞候間、源一郎も然者其通相心得可
申と相答候処、儀左衛門申候者御口上之趣ハ追而
豊後守江相達可申由ニ付、其儀ならハ後刻猶又御模様
前日御寄
伺之ため罷出候哉と相尋候処、及其儀間鋪於豊後守
も外ニ存寄有之間鋪候、自然相替候儀も候ハ、同人可
可及通達候由申候ニ付、源一郎も罷帰候趣申出候

一 右之模様又々大早以飛脚委細申遣候

但一名二ハ、此節合葉湿当之分拾七箱船便ニ差返候
趣一通申遣候

一 去廿六日立中早飛脚到着、一名御用状ニ左之廉々申来
候

此節御番被蒙仰候ニ付例之通中老・番頭・惣御番手
中江御意有之候処、此度ハ魯西亜船渡来中ニ付御番
頭初惣御番手中心得之儀をも被相加候ニ付、手前為
心得写差越候由

一 御番手心得書伺出候ニ付、指図振例と者違候儀も有之
候、甲斐守様御越座被成候節ハ事々手前遂宰判候様ニ
黒田某郎
被及指図置候、是又心得のため申越候由

一 隼人殿弥去廿五日乗船之由申来ル

一 花房久七儀此節御付添被仰付爰元ニ而善大夫と致交代、
魯西亜人帰帆之上久七儀者源一郎と亦々致交代相詰、
源一郎儀者拙者付添ニ而罷帰、善大夫儀者甲斐守様御
帰路之致御付添候様ニ被仰付候、是又為心得申越置候
由

一 源一郎江者月番以切紙右之趣申来ル
一 おろしや御手当覚書写、中老江被相渡候分爰元ニ而本

紙拙者ゝ相渡候ハ、右写之分ハ手前江相納候様可致

候哉之段相伺候ニ付、其通及差図置候条是又心得ニ申

越置候由

善大夫江者手前ゝ相達候様との趣も申来候

一 六郎大夫手元江者此節御手当之御人数・船等之書付被指出候様ニと御目付又者御奉行ゝ御達有之候節書付被

差出候調書来候、其外申来候儀も候得共入組候事ニ付

爰ニ略委ハ館記有

一 今便從 殿様安否被遊 御尋生ほふる一箱、趨漬鯛一

桶被下之候

同晦日晴天

一 遠山金四郎殿着ニ付為御使者富永佐十郎今日致着候得

共、此節者無御用状

一 右之通金四郎殿被致着候間早速出方之上相伺候筈ニ候

得共、御奉行彼方江被相越、其後建山江金四郎殿御越

等之手数有之候由ニ付、同所甚手込之趣ニ相聞候故、

今日ハ不致出方候

一 加番船之内壱艘順風丸致着船候

三月朔日晴天

一 善大夫儀今日以剪紙呼出左之通相達候

立花善大夫

其方儀、拙者江為附屬被指越置候得共、甲斐守様無

程此元御越座之節花房久七為御付添被指越、久七儀

其方と致交代、此元江相滞甲斐守様御帰路之御付添

ハ其方江被仰付候事

一 九郎大夫江以書付左之通相達候、尤前日切紙を以呼出

之儀相達

鉄砲大頭江

白石権右衛門

塩川市助

是迄水浦詰被 仰付置候得共無程御番御請取相成候

得者、魯西亜船之番船并梅ヶ崎固船ニ出役被仰付筈

ニ候其心得いたし候様可被申聞置候事

鉄砲大頭江

津田甚大夫

横田惣六

是迄水浦詰言人充代ルノ致繋船居候得共無程御番

御受取ニ相成候得者、水浦詰之足輕頭兩人共ニおろ

「魯西亜船渡来之記下」

しや船之番船等ニ出役被仰付事ニ候条、甚大夫・惣六兩人共ニ始終水浦江繋船被仰付筈ニ候、其心得いたし候様可被申聞置候事

金四郎殿岩原江被相經候間、同所江今日相勤左之通申述候

金四郎様弥御安泰欣幸之御儀奉存候、此節おろしや船就渡来最前々当表江罷越居申候、依之相応之御用等被仰聞候様兼而官兵衛々申付越候ニ付、彼是為相伺候参上仕候由申達、以後給人迄太刀・馬代披露之儀相頼候、右勤振等於御奉行所相勤候手数同様ニ候、用人宮嶋鉄左衛門と申者及出会候

鉄左衛門罷出申聞候者、御口上之趣被致承知候、春暖之節愈御堅固珍重被存候、此度おろしや船渡来ニ付御出張有之、就右預御尋被入御念候儀ニ御座候、掛御目候積ニ候処御用取調子中ニ而其儀無御座候、重畳宜申述候様との趣被申付候由相伝候、以後別段之口上ニ而御領内通行之節ハ道橋掃除等迄被入御念候儀被存候、此段も宜申述候様被申聞候趣相達候ニ付相応及答引取候

但御役柄之儀故馬代受用無之候、六郎大夫江も一同

被相越候

今日聞役手元々御用有之寛飛脚差立候ニ付、追々参込之御用状付札ニ而差返、右之内甲斐守様御出之儀ハ魯西亜船帰帆之御達無之内ニ御番代相成候ハ、御当番ニ相成候所を以早速御越座被成候方、於御奉行所ニ御都合可然旨をも申越候

指立御用状二者、金四郎殿江今日相勤候模様委曲申越候

源一郎々兼而佐嘉聞役江問合置候おろしや番船交代之都合、彼方々以書付申来候

甲斐守様近日御越ニ付而者六郎大夫御茶屋内住居差問候間、今日々當時船住居被致候

御奉行所家司々致内談度儀候条源一郎罷出候様申来候ニ付、則罷出候処西尾儀左衛門申候者、魯西亜人近日中ニ御呼出ニ付為心得早々及内話候、表立候而ハ明日御達被申候由ニ付此段移合候旨相咄候故、源一郎申候者何日頃ニも御呼出御座候哉と相尋候処、多者来五日ニ可相成由相答候趣源一郎々申出候、就右其段一通追書ニ而六郎大夫々久大夫迄被申越候

新番所御用ニ付何廉と取調子候御用多有之吉藏より善

大夫江申談置候得共、壹人ニ而者手足り不申趣ニ付右御用として罷越居候足輕頭之内ノ善大夫助被仰付候様申出候ニ付、九郎大夫江声掛候

但聞役助ニ而者無之當時受持之所を助させ候

一 聞役呼出ニ付源二郎致出方候処、以書付被相達候ハ近々魯西亜人共御呼出ニ付最前被相達置候通番所仕調等之儀改被相達候

但右之通ニ付何日比ニも御呼出ニ相成候哉卒度承候処、五日・六日比ニ而可有之由相答候、番所引渡之義明日之都合ニ共候而者殊外及差岡候段申達、則今日引渡ニ相成候故早速作事取掛候

一 右達之趣大頭・御用聞・聞役江夫々以書付及口達

一 御当番持大波戸・勝山町ニケ所番所相増候得者、右飾武器加番船ニ積込参居候処未致着船候ニ付甚及差岡候条、おろしや人共御奉行所御呼出等相済候已後御番手之面々着船相成候様、隼人殿江手繰有之度段以飛脚申遣候

同三日雨天

一 上已為祝儀兩御奉行所并遠山殿江相動候、六郎大夫江

「魯西亜船渡来之記下」

も一同被相動、九郎大夫も相動候、其節源一郎同道、用人石川庄右衛門出會、口上申置候御奉行所用人名元ハ相省

一 御国元江今日中早飛脚差立、昨日来之模様申越候

一 吉藏ノ卒度申出候ハ、追々御入用金之儀者申越取寄居候得共、此先何分之御入財ニ可相成哉も難計候条用心金取寄置度候得共、唯今是もと目ニ見江候儀無之ニ、吉藏ノ裏判役并御用聞中江直ニ申越候儀難渋之段申出候、依之遂勘弁候処尤之筋ニ付右用心金ハ差越ニ相成居候様被相達置度旨年番兩人江一名ニ而申遣候、員数等者吉藏より其元同役江申越候様及差岡置候条被遂御詮議候様との趣申遣候

一 新番所江足輕頭浦野半平・吉田作之進被指出候間、嚴重相詰候様可申聞旨以書付大頭江相達候、尤細手数之儀者六郎大夫ノ可相達候ニ付猶及引合候様達置候左衛門佐様昨日御着崎、今日御番所御巡見有之候、御船数者関船七艘ニ候、御奉行所江ハ明日御勤被成候趣〔通島消息〕

二候

一 番所出役心得之儀佐嘉ノ御奉行所江相伺置候末、左之被加付札差返ニ相成候段、今日彼方聞役ノ源一郎江申

越候

右伺書之内ニ番所出役何人差出可申候哉

〔付札^{朱書}〕

物頭壹人・目付式人・鉄砲五挺・弓五張・足輕拾五人・長柄十筋・羽織袴何れも着用

○大波戸ハ鉄砲十挺・弓十張・長柄十本・物頭壹人、目付三人」

御奉行所江同日聞役相詰候節服体何分相心得可申候哉

〔付札^{朱書}〕

初日ハ裏付上下、二日目鬘斗目上下着用たるへし」

一 右目付之儀者此方様ニ而者足輕頭々上席之事故、足輕頭末席ニ目付号之者此節出候而者以後之障ニも相成候

ニ付、此方ニ而者陸目付と取候而、足輕頭取之内若党・草履取召連候而出させ候、尤若党者水夫々召仕候

草履取とても同様

一 四ヶ所番所昼後出来之由普請奉行申出候

同四日晴天

一 六郎大夫申出有之候ハ、昨夜吉藏及書通候者九郎

大夫船今日御茶屋下ニ乗廻候得者、御用便殊之外宜候間其通取計度旨申出候、就右被遂勘弁候処暫滯船之儀

ニ候得者是非相伺得御差図候事ニ候得共、全一日之儀

ニ付^{マツ}鱗船と見込水浦詰足輕頭非番之船四拾六挺を水浦代船ニ遣置、今朝九郎大夫船御茶屋下ニ乗込候儀者苦

間鋪旨及差図候、此段申置候由噂有之候

一 九郎大夫乗船魯西亜人共乗船ニ取用候ニ付前以作事等有之候、依之同人乗船五拾挺立御用ニ而御取上ニ相成、

代船被相渡置候条近々御番手船々廻着候ハ、其節ニ

至御国元々指廻相成居候五拾挺立其方江者被相渡候旨

及口達

但右之代船二者手前江被相渡置候四拾四挺、水浦江

明朝差廻候筈ニ候

一 魯西亜人御奉行所呼出之節ハ海陸共ニ為見物徘徊不致

候様、御木屋住者不及申船住居之面々江達置候様以書

付聞役江相達候

一 番所出来之上御奉行所江申出之儀、佐嘉申合候処改申

出候ニハ及間鋪旨伝之允申聞候由ニ付其通取計置候処、

昼後二伝之允及書通候ハ御奉行所江前刻致出方候節

用人申聞候者番所出来之儀者御両家御届被成二而可有御座段申候二付、一通出来之趣何れ二も御両家御出方可申立段申越候

昨日達之末魯西亜人共呼出之儀明日・明後日間二被相決候を達無之候二付、善大夫儀罷越及間合候処、明後六日之積二有之由何れとも改前日御達可申段用人相答候、右之節番所出来之儀も申達候処速二相調被致大慶候由をも以用人挨拶有之候

御奉行所御家代呼出二付高村慶藏罷越候処、用人池田庄兵衛申聞候ハ番所至而宜致出来候、右二付余目立候間惣様何れ二も塗候様有之度、間役衆江ハ余色々之儀申談候様有之候間慶藏迄相達候、扱又江戸町海手之方町屋甚不見分二有之候二付惣幕張可致旨是又申聞候

大波戸御西役所江上候石段御外浦町之角迄幕張之儀、大村江御奉行所御達二相成居候趣乙名御申出候、しかる所此方様御宿町之儀二付右之通二而者何分難相濟候二付明五日間役罷出其段申達候積二致詮議置候処、右呼出之席二慶藏御申試候処、用人相答候者其儀ならハ此方様御幕張二相成可然候、御奉行所二而者聊差間候筋無之候、為其明日間役衆出方二者不及旨相答無事

相濟候

同五日晴天

去昨日立寛飛脚到着、一名二者去年来伺二相成候番船付方之書付御下知狀一同番頭中江相渡候様最前申来居候処、大村江番船御渡二相成候以後も御番手之方御見守船被差出置候、就右以後迎も其通可相成儀と存候、依之其段書付相添御番頭江相渡可置候得とも、其節之記録長崎江参居候間御国元二而委鋪不相分候二付、此元二而書付相認其砌一同二番頭中江相渡候様申来候最前御国元御申来居候番船付方之儀御下知一件、是御其後付札二而及答置候処承知有之候趣再付札二て申来候

秋月家老中御最前御奉書御奉行所御被相渡候一件申越置候処、甲斐守様御承知被成候旨返答申来候

御奉書持参之面々去月廿九日着、直二小河喜助持参秋月江罷越、同所御翌晦日甲斐守様御使者二而佐嘉江罷越候旨申来、依之御奉行所并金四郎殿江之御勤御下知も間役迄申来候、尤御書案も差越来候

佐嘉間役源一郎江及書通候者、御奉行所御呼出二付

罷出候処用人を以被相逢候ハ、おろしや人共弥明日被
呼出候ニ付、其段各様江者拙者（重田長野）及御通達ニ候様との
趣ニ御座候、扱又左之役々御番所前繁々可罷通候間其
段御達申候趣之書面ニ候

頭取乙名

三加役乙名

年番乙名

同六日晴天

一 今五半時魯西亜人共御奉行所江被召呼候ニ付、御宿町
番所兼々御手当之通役々被指出候

一 右之通御奉行所呼出之間ハ開役江も相詰候様との儀ニ
付、此方様・佐嘉・大村聞役罷越相詰候、尤此方様（重田長野）ハ
源一郎罷越居候而魯西亜人共江御対面之節御達筋等
ハ無御座候哉用人迄及引合候処、今日者誠ニ一通何故
致渡來候哉坏之儀御尋計ニ候、又々明七日被召呼候間
事々今日之通役々相心得可申、尤聞役計ハ麻上下着用
候様との趣申聞候

一 就右池田田庄兵衛（重田長野）卒度申聞候者、秋月様御出之儀おろ
しや人共明七日呼出之上ニ而ハ来十五日ニ帰帆被申付

候積ニ付、其通ニ而者御越之儀候間ニ被逢候様可有御
座候哉之旨申聞候ニ付、源一郎（重田長野）相答候ハ、先日も申
上候通甲斐守（重田長野）之使者于今相滞居候間、被仰渡候趣承
候而早々秋月罷越候筈ニ御座候得共、彼是と日間取可
申候ニ付別段以早便申越候様可致旨相答候処、豊後守
江相逢可申由ニ而立入無程又々申聞候者、何れニも明
七日亦々被致対面候上ニ而被相決候儀ニ付、明日ニ至
今日之模様も取束ね可被相逢旨申聞候趣源一郎罷帰申
出候、依之其段御国元江以早便申越候

但一名之御用状なし、先便ニ來候見守船之一件致
承知候、相調子候上書付相認させ番頭中江相渡可
申段付札ニ而指返候

○今日之模様秋月江ハ開役より申越させ候

一 就右明七日番所出方之足輕頭桐山孫大夫・国友左門名
元出候ニ付、嚴重ニ相勤候様以書付大頭江相逢候
御両家御持場番所左之通

此方様 外浦町

此方様 大村町

佐嘉 本博多町

佐嘉 本興膳町

番所無シ 堀町

佐嘉 豊後町

佐嘉 桜町

御当番持 勝山町

御当番持 大波戸

一 為加番被指越候足輕頭野田三右衛門、船中ニ而致病死候ニ付右為代伊藤十大夫陸路被指越今日着、久大夫

六郎大夫迄状箱差越ニ相成候

同七日雨雷鳴

一 魯西亜人共今日五半時罷出候筈ニ候処、天氣相ニ而四半時御奉行所江致出方、事々前日之通

一 源一郎又々相詰居候間、おろしや人共退去之上用人迄

及問合候者、今日之模様ニ付御達等も有之候儀ニ候哉承候処、凡今日被仰付候趣致御請候得共、三ヶ条得と

勘弁仕候而明日までニ可申上旨ニ付来十五日之帰帆不

被相決候、明日御請之模様次第ニ而今一度も可被招呼

候哉、又ハ及其儀間鋪哉、未相分候旨用人相答候趣源

一郎より申出候、依之御国元江其段大早飛脚を以申越

候

但一通開役々秋月江者申越候

一 佐嘉聞役々申聞候者、左衛門佐様江之御奉書御国々去

三日佐嘉江相達候ニ付、左衛門佐様此節之御帰路多羅

二而御拜見被成候、依之御奉行所御勤被成候、其御元

御番手之面々着有之候ハ、御番御渡申ニ而可有御座候

旨申聞候趣源一郎々申出候

同八日晴天

一 去四日立緩飛脚着、一名御用状最前水浦御薬湿当之分

拾七箱差返候儀者申遣置候処致承知、右代之儀者大頭

々同役中江申越たるニ而可有之候段も申越置候得共、

大頭手元詮議有之候処何たる事も九郎大夫々不申越候、

就右何れニも御手当薬之儀ニ付近日中船便次第薬指

越候積ニ候段付札ニ而申来候

一 六郎大夫手元ニ者御両家被仰合番所仕調相成候趣致承

知候旨付札ニ而申来ル

一 夜半佐嘉聞役々以手紙申越候者、明九日九時魯西亜人

共御奉行所江被呼出候ニ付、諸事昨日之通相心得候様

唯今豊後守殿用人より申来候、就右罷越申達候筈ニ御

座候得共相痛居候間乍略儀以手紙申来候旨源一郎より

申出候、依之六郎大夫より九郎大夫渡海之儀被申越候上足輕頭名元出候ニ付、御宿町番所守方嚴重相心得候様大頭江以書付相達候、名元伊藤八大夫・味岡团平諸事一昨日之通筋々相心得候様六郎大夫より被相達候

同九日雨

去三日從是御用心金之儀申越候處、右返答同六日立申早飛脚ニ致承知候、裏判役・御用聞御用聞以見込則今便差越候趣申來候外二、善大夫儀御用聞甲斐守様御歸路之節御付添被仰付候段申渡候趣去朔日之便二申遣置候、末承知之旨再付札ニ而申來候

魯西亜人共九時御奉行所出方御用相濟、以後向御奉行・御目付御列座諸家聞役一同ニ被相達候者、おろしや人共出帆之儀被申渡候、依之浦々嶋々被入御念候様との浦触御狀一通被相渡候、其後豊後守殿肥田領より被及口達候者、魯西亜人とも若御領海等江漂流漂着いたし候か又者風待等いたし候ハ、早速出船候様可被取計候、右船ハ数日被留置候事故早々帰国候様との御趣意ニ付其通相心得候様被申聞候、其末用人申聞候ハ唯今豊後守殿口達之通若漂着等之節ハ被繫留置候而早々出船候様可

被取計候、為其魯西亜人共一通之書被相渡置候間吟味之役々被差越御改有之候ハ、魯西亜人共右之書付付可申旨申渡ニ相成居候間、夫を目当ニ出帆候様可被取計旨申聞候由善大夫申出候

金四郎殿遠山景直呼出ニ付善大夫直ニ罷越候處、御陸目付御小人目付立合ニ而書付被相渡候、金四郎殿出會ハ無之由、右書付之返答ハ来廿日迄ニ差出候様との事ニ候、数ヶ条之儀ニ付略之委鋪ハ有館記

右御達ニ付而者甲斐守様御越座之御目当立兼候間、亦々御奉行所江聞役差出、兼而申上置候通最前之使者相滞居候ニ付今夕致出立させ、早々甲斐守江申遣儀ニ御座候、其上者早速罷越ニ而可有御座候段用人迄申入させ候處、致承知右之儀一通之事ニ候ハ、後刻可申達との趣相答候旨善大夫申出候

右之趣大早飛脚を以御国秋月江も申遣候、喜多村十助江者達之趣聞役之致書取相渡、今夕早々差立候大波戸番所今夕佐嘉より此方江差返候

但御奉行所用人よりも勝手次第二解除候様申聞候由
二候

同十日晴天

昨日金四郎殿被相渡候書付之趣不分之處有之、今日善大夫岩原江罷越、御徒目付及出会度段申入候処、兩人共ニ留守ニ而金四郎殿江も立山江御越之由ニ付無其儀候、然処用人申聞候者何分之儀ニ而御越有之候哉と相尋候ニ付其段申聞候処、其儀ならハ御徒目付申談相伺置可申ニ付明日為承候罷越候様相答候趣善大夫より申出候

吉藏（通山景吉）申出候者、番所仕戻之儀ニ付員數書付をも見せ候処、存寄も無之候間其通聞置候

一番所御用之御馬最早入用有之間鋪候間、明日明後日二かけ差返度段吉藏（通山景吉）申出候ニ付、則其通承置候

一 隼人殿江去二日以飛船申越置候処、同七日平戸ニ而相達候由ニ而一通承知之旨付札ニ而返來、外二九日付ニ而別封箱來候、右者天氣不順ニ付急用丸同日迄通船難相成相滯居候間足輕計揚陸申付右封箱ニ受取今夕致着候

但船者今日平戸領たひらより出船七半時致着

同十一日曇

「魯西亞船渡來之記下」

一 昨日之末為承候金四郎殿江善大夫罷越相尋候処、惣船

數御人数御武器等之儀御書出相成候而宜候、其上ニ而金四郎殿存寄も候ハ、其節可被申聞候由被相答候趣善大夫（通山景吉）申出ル

一 其後立山江罷越、魯西亞人共帰帆之節ハ最前之通御台場飾等有之儀ニ候哉又者不及其儀候哉相尋候処、用人相答候者其儀未相決候、明日ニも相決候ハ、御達可申候由申聞候段善大夫（通山景吉）申出候

一 右金四郎殿（通山景吉）御答之趣、今日亦々大早飛脚を以御国江申遣候

一 魯西亞人乗船ニ相成候五拾挺立、何れニも作事ニ不相成候而ハ難相濟ニ付、今日（通山景吉）弥作事ニ取掛候様宮本帶刀江相達候

但吉藏江者六郎大夫（通山景吉）被相達候

同十二日雨

同十三日雨

一 九郎大夫呼出相達候ハ、番所御用之足輕頭最早帰国可被仰付候得共、御番手之面々着船迄居残候様可被申聞

置旨相達候

一 吉藏ヨシサカ申出候ハ、普請奉行根本源七儀番所御用跡調子來十五日迄ニ而相仕廻候故、被指立方等ハ御詮議も可有御座候条、此段申上置候旨申出候ニ付是又同様ニ御番手之船々致着候迄相滞候様可相達置旨同時ニ申聞候魯西亜船帰帆之節者亦々御台場飾等有之儀ニ可有御座、猶又及問合并御石火矢飾付等も可有御座候哉杯源一郎ハシノ御奉行所用人江承合候処未相決候、然共多御台場飾等二者及間鋪、御石火矢挽直ハ勿論無之事候、御当番方御番所人数等最前挽入之節とハ三ツ沓ツ減候方ニ可相成候由用人相答、問合之廉々明日ニも以書付相伺候方速ニ可有之段申聞候趣源一郎ハシノ申出候

同十四日晴

一 昨日御奉行所用人申聞候通、水浦幕張等之儀今日源一郎ハシノ書付用人江為持遣候
一 魯西亜人乗船御手当ニ相成居候五拾式挺立宝円丸、楠泊出船ニ而今日着、御台所御用之品々積越候

同十五日晴

一 御奉行所ハシノ呼出ニ付善大夫致出方候処、昨日用人迄指出候書付ニ付札ニ而被相渡候ハ、水浦・大鳥崎幕張其外武器飾ニ不及候、水浦江者御人数少々被差置候而船も是迄之心得ニ而宜候、御非番方御台場飾是又不及其儀趣ニ候

一 今日聞役手許ハシノ中早飛脚差立候ニ付、惣当二者右之趣申遣候

一 最前湿当合葉之儀再付札を以先月九郎大夫ハシノ同役中江委細可申遣候由之所、掛合落ニ相成候趣ニ付、猶又其後細々申越候由、一名付札御用状ニ其段申遣候

一 去十二日立大早飛脚着、一名ニハ例甲斐守ハシノ様御越座之節月番ハシノ番頭中江切紙ニ而前以御同人様当地御着之上御番所御巡見道生田江も御越有之候ニ付、先格之通相心得候様申入儀ハ存之通ニ候、然ニ此節ハ急速之御事ニ付御発駕之節か又者御旅中ニ而番渡之儀御聴可被成候、右之通ニ而者何分御発駕前月番ハシノ仕出之都合も不相整候ニ付、御旅中ニ而御承知被成候ハ、加藤大三郎ハシノ其段可申越候間、手前ハシノ切紙相達候様可相心得、若御着津之上御承知被成候節ハ翌日御巡見被成候、此節ハ事々御省略ニ相成候間、加差引宜取計候様との趣申

来候

一 六郎大夫手元江者、重田長舒甲斐守様去十二日秋月御発駕、明

十六日矢上ハ御着津之旨申来、然共大三郎手元ハ被申越候者、明後十七日御着之趣申来候

一 去朔日・同三日・六日・七日・九日追々差立候飛脚御用状、夫々承知之旨一通付札二而返来ル

同十六日晴

一 甲斐守様矢上御泊所江御容子為何、御供家老迄九月立之通書状差越候

一 御通船今日西高ハ致着船

一 惣御番手之面々今日九半時神嶋着船之趣九郎大夫ハ申出候二付、隼人殿初御番手皆々例之通船飾二相心得、

御番交代之儀も最早佐嘉於御方御奉書御拝見も相済居候間、是又例之通神嶋ハ直二御番所江使者差越不苦趣

以飛船隼人殿江及書通候

一 彼方ハも以飛船心得之廉々問合有之候得共、是ハ申越置たる事而已全行違二相成候二付、右之趣一通付札二

而及返答候

一 御番手之面々七時過水浦着船之趣番頭中ハ以手紙相届

候、就右一通致承知候段及答

一 御座船七時致着

一 隼人殿江も御番手一同御茶屋下江着船有之候

一 中老・番頭中江以書付相達候者、此節魯西亜船番船梅ヶ崎固船等二御番所詰足輕頭之内ハも出役被仰付、足

輕よりも同様二被仰付事二付其心得有之候様相達候

一 大頭・船手頭江以書付相達候者、魯西亜番船二出役之面々不行義無之作法宜嚴重二相勤候様可申聞段相達候

一 魯西亜人為固船梅ヶ崎出役之足輕頭江以書付相達候様大頭江申聞候ハ、若使節之者本船江罷越度趣公船ハ申

通候ハ、早速水門之錠明乗候儀者早々可相伺旨申達候

一 九郎大夫乗船御用二付御取上二相成居候処、此節おろ

しや人為乗船差廻之五拾挺立を其方江被相渡候間、船手頭江も右之趣申聞置候引合候而受取候様相達候

一 船手頭江も同様之趣為心得及口達

一 小川権左衛門ハ被申出候ハ、御番請取候上御奉行所出方之儀者此折柄二付兩御番所ハ老人充罷出候而者如何

可有御座哉之旨伺有之候、就右遂勘弁候所尤之儀其通聞置候、然処又々被申出候者追而御奉行道生田辺巡見

之節も同様相心得可申候哉相伺候由二付、是又直二開置候、然共其度々御奉行所江ハ被申通置候様相達候

隼人殿着之上、何分書通ニも難申遺廉々申合候ヶ条之

内二池田庄兵衛一件咄合候処、同人江も至極同意之趣

二付於爰元ハ手前重畳取計見可申、御国方之儀者同人

受持被申候由二咄合候

矢上江差越置候飛脚罷帰、從是申上候趣（池田長持）甲斐守様江申

上候段返札来ル、其後從彼方以飛脚今夕矢上御着明朝

長崎御着之旨、宮崎織部・吉田縫殿助（池田長持）申越候

同十七日晴

（池田長持）

甲斐守様四半時御茶屋御着、右之節去秋之通御書院屏

風仕切之処江罷出ル、隼人殿江も被罷越居候付、同所

江出方有之候

於詰所御供家老迄御機嫌相伺候看一鉢差上候

去十五日立大早飛脚着、一名御用状ニ者此節魯西亜船

帰帆之節自然御領海江漂流之節爲御手当、足輕頭（池田長持）忝人

組三人、御船二拾挺立老艘・急用丸壹艘充、尤代船二

而藍嶋玄界大嶋江被出置之旨爲心得申来候

但惣当御用状ニ者、遠山殿より尋之廉々来廿日前二

者調子出来之積候へ共、若難差越も可有御座哉、其節ハ宜申延方ハ有之間鋪候哉之趣申来候

甲斐守様（池田長持）御庭内之華一折被下候由、御供家老より相

達候間、直二御礼をも申上候

其後上野甚左衛門（御馬廻）御使者二而、例之通御有一折被

下候二付、及出会御請申上候

但服体付送等例之通

右爲御礼御茶屋出方宮崎織部迄申上置退出

甲斐守様・両御奉行所并金四郎殿江も八半時御出被成

候、御勤之振合ハ魯西亜船帰帆ニ而御越被成候処、御

番手着船交代之儀御聞被成候間、猶又御巡見被成候上

亦々御出可被得御對話旨被仰述候

御番交代相済候上、隼人殿初御番頭中、御奉行所出方

ハ夜二入候而者不都合ニ候得共、此折柄故勤ニ相成候

兼而御国元（池田長持）申来居候通、御下知状類今夕權左衛門・

直右衛門御茶屋江呼出相達候、其節番船付方之儀ニ付

去年来御奉行所江伺ニ相成居候廉々二付札有之分も一

同相渡候

明日御番所御巡見之儀番頭中江以手紙申入ル

同十八日晴

一 御当番方御心得之儀ニ付数ヶ条御奉行所江何書先日差
出置候処、付札ニ而是又御指図有之候、右之内御番所
江武器飾之ヶ条不分之儀有之候ニ付、猶又今日源一郎
が御奉行所江及問合候処、矢張御武器飾御旗迄も立配、
最前之三ツ一之減候方ニ而宜旨、用人を以被申聞候、
以後又々申聞候者、魯西亜人共明十九日致出帆候弥之
儀者昼比相達可申段相咄候趣源一郎が申出候
(里田兵衛)
一 甲斐守様而御番所御巡見道生田江も御越被成候、六郎
大夫・善大夫御跡が罷越候、尤御番頭中居木屋者交代
砌ニ而、不都合ニ付而御藏而已被成御覽候

但番頭中居木屋ニ而御意達之儀者、御茶屋江御帰座
之上為御機嫌伺出方之節達有之候

一 右相済以後、而御奉行所并御目付江も御出御勤被成候
右廉々御国元江以飛脚申遣、尤手前初齋藤三郎大夫江
も加判有之候

一 魯西亜船弥明十九日出帆之儀、御奉行所が閑役江通達
有之候

一 就右早速御番所飾等之儀夫々申合、左之通御武器数ニ
相決候

惣廻御幕張前通、御鉄砲百挺・弓五拾挺・御旗十流・
本陣木屋之辺長柄計拾本充

一 御番所前通、手前初中老何れも御台場守衛之通、武器
飾船ニ而出張之筈ニ申合候

一 右之趣吉田縫殿助を以 甲斐守様江一通申上候
(里田兵衛)

一 例之通御料理御相伴被仰付候筈之処、右御用相記候故
御断申上候、尤御用ハ木屋ニ而相調子候

一 隼人殿今日迄も戸町滞船之趣ニ付、魯西亜船出帆之節
而御番所武器飾等有之候ニ付、同所繫船も不都合ニ付、
相隔候湊江繫替有之候歟又者而御番所間江繫船有之候
歟之儀及書通候処、外ニ相応之湊も無之福田者灘口之
事ニ付若しけ共ニ相成候而者難決ニ付、亦々御茶屋下
ニ繫船有之度無程乗込候様可致旨返答来候

一 水浦詰石火矢役而御番所繫船ニ取用候ニ付、跡水浦江
ハ新番所御用之足輕頭式人、御座船頭漕二艘二疋人充
乗せ、組水浦江為固候

同十九日晴

一 隼人殿一旦御茶屋下江乗込繫船有之候得共、天氣能又々
出船ニ相成候条、船飾者平常之通之御番交代之振合ニ

「魯西亜船渡来之記下」

準被取計候様申談候

一 五時過西泊江罷越、前日評議相決居候通武器飾繫船いたし候

一 魯西亜船八時御番所前通船、挽船此方様（成瀬止定）の百艘被指出候

一 權左衛門（里田友好）の右通船相濟候趣、御奉行所江相勤可申哉之旨申出有之候二付、不及其儀候、甲斐守様江者出方之上被申上候様及差図候

一 彼船高鉾沖江旋入繫候趣、河村五大夫より申出候二付、御番所前引払候

一 今日御番所前無別条通船、高鉾沖江繫船之趣、御茶屋出方之上甲斐守様江申上候（里田友好）

一 就右甲斐守様御奉行所御勤被成候筈之處、夜二入御出不被成候条、御越座方より飛脚差立無之候、依之手前（成瀬止定）の前文之廉々大早飛脚差立申越候

同廿日晴天

一 甲斐守様御奉行所江四時御出被成候處、因幡守殿江も御出二而御對話有之候二付、御同所者別段御出無之候（成瀬止定）

但金四郎殿江者御出御対面被成候、尤建山二而者帆（遠山寛生）

影見隠候迄源左衛門被殘置候趣被仰述候

一 魯西亜船繫場の御番所見通不申候二付、武器飾引取之儀御奉行所江申達置候間、取除之儀五大夫江及口達候

一 九郎大夫・吉蔵其外新番所御用之足輕頭、御用相濟候二付仕廻次第引取候様相達、尤普請奉行并水浦詰足輕頭石火矢役も同様可申聞旨、書付又者口達二而相達候

一 新番所之儀二付役々心配有之候二付、都合宜旨豊後守殿より甲斐守様彼方御出之節厚挨拶有之候段甲斐守様の手前江被仰出候、依之役々呼出御沙汰之趣及口達候

但御奉行所江者御同人様より役々江被相伝候段間役御使者二而被仰遣候、別段二役々御礼として御奉行

所不及出方相濟候

一 諸熊作多夫の源一郎江、おろしや船小瀬戸より帆影見隠候趣暮比以手紙相知らせ候

同廿一日雨

一 津田甚大夫儀自分陸地罷帰度段以横折相願候趣、委細九郎大夫の申出候二付、直二間置候旨相達候

一 番所御用之足輕頭、普請奉行明廿二日出立之儀申出候間、則一同呼出候而持參状相渡候、尤其節大頭致出席

候

一 御奉行所より手前出立ニ付例之通押掛三以捻被相送候間、則对家司江従是も以捻返答申遣候

一 御座船御通船共ニ今日一同出船

一 御奉行兩人・御目付一同、御番所渡海沖巡見之内、風

波手強此上通船難相成程之儀ニ付、不得止事御番所より急用丸式艘外ニ浦船取受候而挽船差出させ候趣、其

節出方之聞役花房久七より罷帰候上申出候

一 魯西亞船帆影見隠候段、御奉行所用人より聞役江及通達

候得共、御奉行御番所巡見直ニ出嶋江被相越、夜ニ入

候趣ニ相聞候ニ付、今日建山不致出方候

一 右之趣ニ付番船等入用も無之引払可申、且右之通引取

候上ハ、其段御奉行所江番頭罷出相届置候様及通達候

御国元去十九日立大早飛脚着、金四郎殿(遠山報告)尋之廉々調

子之上御領海漂流之御手当者追々御書出ニ相成居候形

を以清書ニ相成候而、則差越來候魯西亞御手当調子ハ

於御国元者難決所も有之候故、下書ニ而遣候間猶爰元

ニ而相調子候様申来ル

一 右之飛脚不致到着前(報告)ニ遠山殿江久七罷出候処、用人よ

り及催促候ニ付同人相答置候者、今日迄も国元より差

越不申候、若間ニ合不申候節ハ領内御通路之節指上候

而者何分可有御座哉之趣相尋候処、用人相答候ハ相成

たけ当津ニ而被差出候様存候、然共間ニ合不申節ハ大

坂江四・五日滞留有之候ニ付其内ニ共被差出候ハ、都

合能可有之段申聞候趣久七より申出候

一 就右今少得と取調子之上、大坂又者帰府之上被指出可

然と遂評議、此節先御国元江持帰候筈ニ相決候

同廿二日晴

一 五時御奉行所出方之上引払之儀相伺候処、豊後守殿对

面有之勝手次第引取候様との挨拶有之候ニ付、相応及

返答退去之節前日押掛被相送候礼をも用人迄申置候

因幡守殿・金四郎殿(高木)・作右衛門殿江も同様相勤候

一 権左衛門・五大夫呼出相達候者、魯西亞船在留中ニ付

各乗船被残置候得共、出帆以後帆影も見隠、最早御用

も無之候ニ付、帰船候様可被取計旨相達候

一 おろしや御手当書、御国ニ而被相渡置候写、本書と取

替権左衛門江相渡候

一 右之節見守船之船組五大夫一同是又権左衛門江相渡候

一 五大夫江者増足輕引払之儀をも以書付相達候

一人 同人之魯西亜御手当御武器差留置候趣申出候ニ付、直ニ承置候

一 宮本帶刀儀御用無之候ニ付引弘候様相達候

一 松本五郎八儀も同様之趣書付を以九郎大夫江相達

一 源一郎儀手前付添被仰付置候得共、同役申送不相整候ニ付、一兩日後レ出立候様有之度旨六郎大夫ノ申出有之候間則其通承置候

一 歸路逆も飛脚足輕八人御定之通召連候筈ニ有之候得共、

一 最早御用無之候ニ付四人召連候

昨今之模様御国元江大早飛脚差立申越、（前田長時）甲斐守様御同中江も大三郎迄委細申越候

同廿三日晴

一 五時長崎出立同廿七日佐嘉通致帰着候